

自伝的記憶研究の理論と方法(2)

佐藤 浩一
(群馬大学)

越智 啓太
(東京家政大学)

神谷 俊次
(南山大学)

上原 泉
(清泉女学院大学)

川口 潤
(名古屋大学)

太田 信夫
(筑波大学)

2005 年 2 月

J C S S T R - 5 5

[連絡先]

佐藤 浩一

〒 371-8510 群馬県前橋市荒牧町 4-2

群馬大学教育学部

E-mail : sato@edu.gunma-u.ac.jp

© Koichi Sato, Keita Ochi, Shunji Kamiya, Izumi Uehara, Jun Kawaguchi, & Nobuo Ohta, 2005

日本認知科学会

事務局

〒 464-8601 名古屋市千種区不老町

名古屋大学大学院 情報科学研究科 認知情報論講座内

Tel : 052-789-4891 Fax : 052-789-4752

E-mail : jcoss@jcoss.gr.jp

*Theories and research methods of autobiographical memory (2)*1*

Koichi Sato*2, Keita Ochi*3, Shunji Kamiya*4, Izumi Uehara*5, Jun Kawaguchi*6, & Nobuo Ohta*7

要約

「自伝的記憶」とは、人が生活の中で経験した、さまざまな出来事に関する記憶の総体である。自伝的記憶についての研究成果は、この 25 年間で急速に蓄積されてきた。しかしながら、多彩な知見が蓄積されている反面、自伝的記憶独自の理論や研究方法の構築は遅れている。本論文では自伝的記憶の研究方法来に焦点を当て、(1)研究方法の拡がりと収束的証拠の重要性、(2)実験の統制と再現可能性の問題、(3)1 事例の日記研究の有効性、(4)乳児期から児童期に至る縦断的研究の有効性が検討され、今後の方向性が議論された。

key words: autobiographical memory, methodology, theory, experimental study, case study, diary study, longitudinal study

*1 本論文は、日本心理学会第 68 回大会(2004 年 9 月 12-14 日)におけるワークショップ「自伝的記憶研究の理論と方法(2)」の話題提供と指定討論をまとめ加筆したものである。なお著者名の記載順は、ワークショップにおける発表順に従っている。

*2 Gunma University (sato@edu.gunma-u.ac.jp)

*3 Tokyo Kasei University (ochi@tokyo-kasei.ac.jp)

*4 Nanzan University (kamiya@nanzan-u.ac.jp)

*5 Seisen Women's University (iuehara@seisen-jc.ac.jp)

*6 Nagoya University (kawaguchij@cc.nagoya-u.ac.jp)

*7 University of Tsukuba (nobohta@human.tsukuba.ac.jp)

はじめに

If there is one topic that binds the various subdisciplines of psychology together, it is memory. (Ross & Buehler, 1994, p.55)

「自伝的記憶」とは、人が生活の中で経験した、さまざまな出来事に関する記憶の総体である。日常認知研究の隆盛とともに、自伝的記憶についての研究成果も、この 25 年間で急速に蓄積されてきた。しかし、研究の表向きの隆盛とはうらはらに、「結果の再現性が低い」「概念が曖昧である」「記憶理論全体の中での位置づけや独自性が不明確である」といった問題点が指摘されることもある。確かに記憶研究全体の中では、自伝的記憶研究はたかだか 25 年程度の歴史しか有していない。しかし、25 年という歴史があるわりには、理論や研究方法が未発達であるという見方もできる。これは、いわゆる「生態学的妥当性」を追求する「日常認知研究」の大きな波の中で、テーマの面白さに目を奪われ、研究方法や理論をめぐる議論が後回しにされてきたことにもよると考えられる。

こうした問題意識を背景に、2003 年に開催された日本心理学会第 67 回大会で、「自伝的記憶研究の理論と方法 - 研究の現場から」と題するワークショップが企画され、その成果は 2004 年 5 月に、日本認知科学会テクニカルレポート (No.51) として公刊された。さらに 2004 年に開催された日本心理学会第 68 回大会では、自伝的記憶の研究方法を中心テーマにすえたワークショップ「自伝的記憶研究の理論と方法(2)」が企画された。本論文はこのワークショップにおける話題提供ならびに指定討論に基づき、さらに、ワークショップでは十分検討できなかった問題についても議論を深め、今後の研究方法のあり方を検討することを目的としている。

本論文は以下の構成になっている。まず、自伝的記憶研究に取り組んでいる 4 名の話題提供者が、研究方法上の諸問題や、自らが研究で用いている独自の研究方法を紹介する。

佐藤氏は自伝的記憶の様々なテーマについて、実験的研究・相関的研究・記述的研究が、それぞれ異なる視点から有益な知見を提供していることを指摘する。そして、様々な方法論を柔軟に利用しつつ、収束的妥当性を追求することが必要であると論じる。

越智氏は、自伝的記憶の実験には「再現性の低さ」や「事後的解释の容易さ」といった問題がつきまとうことを指摘する。そしてそのことが、自伝的記憶研究において理論やモデルが乏しいという事態を引き起こしていると論じる。

神谷氏は日誌法を用いた研究を概説する。さらに、自分自身を被験者として、日誌法で不随意記憶を検討した結果が紹介される。自伝的記憶の機能に関して明らかになった知見が論じられ、さらに、この手法により自伝的記憶の体制化の解明にもつながることが指摘される。

上原氏は 9 組の母子を対象に、約 8 年間にわたり、エピソード記憶や自伝的記憶の形成をリアルタイムで追跡した縦断的研究の成果を紹介する。「エピソード報告」「再認」「記憶語の自発的発話」という 3 つの能力の開始時期から、乳幼児健忘のメカニズムが論じられる。

これらの話題提供を受けて、今後の自伝的記憶研究のあり方をめぐり、指定討論が行われる。川口氏は、自伝的記憶と重なるところの多い Tulving のエピソード記憶理論に言及しつつ、自伝的記憶やエピソード記憶がヒトにとってどのような意味を持つのか、その「機能」に着目することの重要性を説く。太田氏は自伝的記憶がきわめて多様であることから、多面的な手法を用い、構造やメカニズムをいっそう詳細に検討し理論化することが必要であると指摘する。さらに自伝的記憶が様々な領域と関係することから、自伝的記憶研究の観点から心理学の再編が可能であることが述べられる。

(佐藤 浩一)

1 自伝的記憶研究における方法論的折衷主義

- 収束的証拠を求めて -

群馬大学教育学部 佐藤浩一

本稿では、日常認知研究が盛んになるに従って、記憶研究がどのように変化したかを簡単に振り返る。続いて、現在の自伝的記憶研究が特定の研究方法に縛られることなく、いわば「方法論的折衷主義」の立場に立っていることを指摘する。そして、こうした折衷主義的な立場に立って「収束的証拠」を収集することが、研究の妥当性につながる可能性を論じる。

1. 日常認知の拡がりや記憶研究の変化

1970年代後半から、「日常認知」研究が次第に盛んになり、現在では完全に市民権を獲得していると言えよう。こうした流れの中で、記憶研究も大きく変貌してきた。この変貌を一言で表現するなら、「研究対象である記憶そのものが豊かになるにつれて、研究方法も多様になった」と言えるだろう。

かつて「記憶」が「学習」の一部であり、「言語学習」と称されていた時代には、系列学習や対連合学習という手法を用いて、連合理論に基づく研究が行われていた。記録材料として用いられたのは無意味綴りや単語リストである。検討しているのが学習理論一般である以上、材料に何をを用いるかはあまり大きな問題ではなく、そうであるならば実験者の側で統制しやすい材料を用いて、クリアな結果を導き出すことが大切だからである(注1)。

ところが認知心理学の時代になると、研究対象である記憶そのものが変貌してくる。記憶は単一のシステムではなく、「短期記憶・ワーキングメモリ・長期記憶」「エピソード記憶・意味記憶・手続記憶」等々、複雑なシステムの複合体であることが明らかになってきた。さらに日常生活を支える様々な記憶機能に関心が集まるようになり、その結果、顔の記憶/感情の記憶/場所の記憶/行為の記憶/会話の記憶/展望的

記憶、そして自伝的記憶等々、様々な研究テーマが咲き誇ることになったのである。

こうした状況では、「言語材料の対連合学習や系列学習を用いた研究によって、記憶システム全般を支配している連合法則が明らかになる」という姿勢をとり続けることは難しい。忘却曲線一つをとっても、エビングハウス曲線とは異なる結果が示された(例: Linton, 1982)。研究者たちは、各々のテーマにふさわしい研究方法を工夫しなくてはならなくなった。

2. 自伝的記憶 - 研究方法の特徴

(1) 自伝的記憶研究が抱える事情

【統制の難しさ】認知心理学の時代になっても、「エピソード記憶」とは「時間と場所が特定できる経験の記憶」であり、それを検討するためには「ある日ある時、ある実験室で記録した(言語)材料の記憶」というパラダイムが好んで用いられていた。そこでは全てが研究者の統制下にあり、実験室実験以外の研究方法はほとんど不要であった。このように、重要な変数を研究者が統制できるという点は、日常認知研究のいくつかのテーマにも当てはまるだろう。しかし自伝的記憶では、記憶の内容は被験者の側にあり、研究者はそれを何とかして掘り出さなければならない。そこで、「実験」以外にも使えそうな方法は何でも使うという貪欲さが、研究者には求められるのである。

【他領域との結びつき】自伝的記憶はわれわれ一人一人の存在を支える記憶であり、パーソナリティ・発達・対人関係・感情等々と密接につながりを有している。そのため、これら関連領域で開発された手法を借りることも必要になる。また、他領域の研究に取り組んでいた人が、自伝的記憶研究に移行してくることもある。その場合、それまで別の領域で用いられていた手法

がアレンジされて、自伝的記憶研究に持ち込まれることも十分考えられる。例えば、発達の研究が認知発達の一環として自伝的記憶を検討する場合には、縦断的研究や親 - 子の会話分析といった、これまでの記憶研究では余り用いられなかった手法が利用されることになる。高齢者の精神的健康の問題に取り組んでいる研究者が、自伝的記憶研究に参入して、回想行動の頻度や質と精神的健康との相関を検討したり、語りの構造を分析することもあるだろう。

(2) 自伝的記憶研究のテーマと方法

こうした研究事情から、方法に関しては「何でもあり」という"折衷主義"の状態になっていることが考えられる。そこで自伝的記憶研究のいくつかのテーマについて、研究方法を大きく分類し、具体例を示そう(表 1-1)。研究方法は次の4つに分類された。

記述的研究	現象の記述を主目的とする。時間経過に伴う変化を検討するものも含む。
相関的研究	複数の変数間の相関を検討する。発達に伴う変化を検討するものも含む。
実験的研究	研究者側が独立変数を操作し、被験者を割り当てる。準実験的なものも含む。
実験的研究(被験者のタイプを操作)	様々な被験者のタイプによって、自伝的記憶の想起がどのように異なるかを検討する。

いずれのテーマにおいても、これら4種類の研究方法が混在していることがわかる。次に自伝的記憶の「構造」と「機能」を例にとり、様々な研究方法の具体例を見てみよう。

【自伝的記憶の構造(体制化)】Conway & Bekerian(1987)は検索手がかりを操作し、自伝的記憶の検索潜時に及ぼす影響を実験的に検討した。"Lifetime period"を示す語(例「大学時代」)に続けて、被験者がその時期に経験した出来事(例「イタリア旅行」)を呈示し、さらにそこから特定の出来事の自伝的記憶を想起するよう求めた。すると、"Lifetime period"を呈示しない

条件に比較すると、検索潜時が有意に短いことが示された。ここから自伝的記憶は「時期」によって大きく体制化されており、その中がさらに様々な出来事によって分かれているという階層構造が提唱されたのである。

しかし自伝的記憶の構造を規定するのは、時期や出来事などの明示的な要素だけではない。本人が出来事の間にもどのような因果連関を認めるかも、構造に関わっている。この点に関して、Conwayよりは素朴な手法で記述的に検討したのが、Brown & Schopflocher (1998)である。彼らは手がかり語から特定の自伝的記憶の想起を求め、さらにその記憶を手がかりとして、次の記憶を想起させるという手法(event-cueing)を開発した。そしてこの方法を用いた研究から、連続して想起された出来事ペアの約53%で、一方が他方の原因になっていることを見出した。この結果は、自伝的記憶が因果連関に従って体制化されていることを示唆している。また、こうした因果連関による体制化は、発達に伴って次第に重要度が増すようだ。Habermas & Paha (2001)の相関的な研究では、12 ~ 18歳の女性にライフストーリーを語ってもらったところ、年齢が上がるに従って、因果連関を示す表現が増えることが見出されている。

【自伝的記憶の機能】Pillemer(1998)は自伝的記憶を収集し、その内容分析に基づいて、自伝的記憶が行動や判断を方向づける「指示機能」の存在を指摘した。こうした記憶は折に触れて想起され、自分の価値観を確認したり、行動を決定するヒントを与えてくれる。

指示機能については実験的な検討も行われている。Evans, Williams, O'Loughlin, & Howells (1992)は自殺未遂者と統制群の被験者に、「社会的問題解決課題」を提示した。これは社会生活を営む上で遭遇する問題場面を呈示して(例「引っ越してきたばかりで近所に知人がいない」)、その解決策を答えさせる課題である。あわせて、手がかり語法によって自伝的記憶の想起を求めて、どれくらい具体的な想起が可能

表 1-1 さまざまな研究テーマと研究手法

	記述的研究 / 時間経過に伴う変化	相関的研究 (発達に伴う変化を含む)	実験的研究	実験的研究 (被験者のタイプを操作)
自伝的記憶の構造と検索	・日誌に記録された自伝的記憶の時間経過に伴う忘却。(Linton, 1975; Wagenaar, 1986) ・event-cueing法で、どのような出来事がクラスターを構成して想起されるか検討。(Brown & Schopflocher, 1998) ・夏休みの出来事の詳細から体制化を分析。(Barsalou, 1988)	・発達(12 ~ 18歳)に伴ってライフ・ナラティブの中に因果連関を示す表現が増える。(Habermas & Paha, 2001)	・検索手がかり(言語材料や匂い)を操作し潜時や想起率を比較。(Anderson & Conway, 1993; Barsalou, 1988; Conway & Bekerian, 1987; Ehrichman & Halpern, 1988; Fitzgerald, 1981; Herz & Schooler, 2002; Reiser et al, 1985; Robinson, 1976)	・うつ状態、ストレス障害、PTSDと記憶の概括性。(Harvey et al, 1998; Williams, 1996)
機能(自己)	・生活史の分析からライフテーマを抽出。(Csikszentmihalyi & Beattie, 1979)	・自伝的記憶の想起と個人差変数との関連を検討。(社会的動機: Woike & Polo, 2001; 生殖性: McAdams et al, 1993; 自己複雑性: Sakaki, 2004) ・高齢者で、経験への開放性(openness)と「アイデンティティ」機能が関連している。(Molinari et al, 2001)	・学期のはじめを「最近」「だいぶん前」と教示し、その時点での自己に関する評価を求める。遠い過去に対しては批判的。(Wilson & Ross, 2001)	・アイデンティティスタイルによる想起の違い。(Neimeyer & Metzler, 1994) ・抑圧的コーピングスタイルによる想起の違い。(Newman & Hedberg, 1999)
機能(社会)	・記憶を共有することによる集団の維持。(小林, 1987; Pillemer, 1992) ・社会的な出来事の記憶におけるパンブ現象。(Holmes & Conway, 1999; Schuman et al, 1997) ・会話に含まれる自伝的記憶の内容分析。(Hyman & Faries, 1992)	・回想機能尺度における「教育・情報伝達」得点は、若年層より30歳代以上の方が高い。(Webster, 1997) ・高齢者で、愛着スタイルと「教育・情報伝達」機能、外向性と「会話」機能が関連。(Molinari et al, 2001)	・聴き手の反応の仕方によって、語り手の語る内容が変化する。(Baveas & Johnson, 2000)	・親子の性別による想起スタイルの違い。(Fivush, 1998; Reese & Fivush, 1993) ・自伝的記憶の性差(語りの緻密さや感情を伴う程度)。(Davis, 1999)
機能(指示)	・「自分の人生に影響した出来事」の記憶を収集し機能を分類。(Pillemer, 1998) ・大学時代の記憶は入学直後の出来事が想起されやすい。(Pillemer et al, 1988)	・初経に対する予備知識がない女性ほど、その経験を詳細に想起できる。(Pillemer et al, 1987) ・概括性の高い自伝的記憶を想起する人は、社会的問題解決課題の得点が低い。(Goddard et al, 1996, 1997)	・過去の職業目標を回想し発表することが、講義への主体的参加や進路選択を促す。(白井, 2001)	・教職志望意識の強い学生と弱い学生で、「教師にまつわる記憶」を比較。(佐藤, 2000) ・抑鬱(自殺未遂)群と統制群で、概括性と社会的問題解決の関連を検討。(Evans et al, 1992; Sidley et al, 1997)
パンブ現象	・パンブ現象。(Rubin et al, 1986)	・世代の異なる被験者でパンブ効果を比較。(Rubin & Schulkind, 1997) ・アメリカへの移住時の年齢が異なる人を対象にパンブのずれを検討(Schrauf & Rubin, 1998)	・教示や手がかり語を操作しパンブ効果の変化を検討。(Jansari & Parkin, 1996; Rubin & Schulkind, 1997)	・アルツハイマー型痴呆の高齢者と対照群でパンブ効果を比較。(Fromholt & Larsen, 1991)
幼児の自伝的記憶の発達	・2歳以前に経験した出来事(弟妹の誕生)の記憶の正確さ。(Eacott & Crawley, 1999) ・最初期記憶と7歳以降の記憶の比較(心像性、感情価、等)。(West & Bauer, 1999) ・遠足等の記憶の時間経過に伴う変化。(Hamond & Fivush, 1991; Hudson & Fivush, 1991)	・認知発達との関連を検討(心の理論: Welch-Ross, 1997; 言語発達: Harley & Reese, 1999; 初語時期や再認開始時期: 上原, 1998) ・同じ出来事を経験した3歳児と4歳児の想起の比較(Pillemer et al, 1994) ・弟妹が生まれたときの年齢が異なる被験者を対象に幼児期健忘を検討(Eacott & Crawley, 1998; Sheingold & Tenney, 1982)	・手がかり(写真)を操作し、想起に及ぼす影響を検討(Aschermann et al, 1998) ・既知知識に合致する出来事と合致しない出来事の再生の比較(Ornstein et al, 1998)	・親の語りスタイルの相違や文化差が、子どもの語りの発達に及ぼす影響を検討(Han et al, 1998; Reese et al, 1993) ・自己認知課題を通過した幼児と通過していない幼児の比較(Harley & Reese, 1999)
時間情報の想起	・カレンダー効果。(Kurbat et al, 1998) ・出来事の時間幅の評定。(Burt, 1992)	・タイムギャップ感(FOG)と鮮明度・感情強度等の関連。(下島, 2001) ・出来事の示差性、感情価、重要度等と、順序判断との関連。(Burt et al, 1998)	・判断の基準となる出来事の違いが、テレスコーピングに及ぼす影響を検討。(下島, 2001) ・手がかりの呈示がカレンダー効果に及ぼす影響を検討。(Kurbat et al, 1998)	・人生の転機となった出来事の捉え方が、当時と現在で「同じ群」と「違う群」で、FOGを比較。(下島, 2001) ・学年層の異なる大学でカレンダー効果を比較。(Kurbat et al, 1998)
不随意記憶	・日誌法で不随意的検索を収集し、その特徴や機能を分析。(Berntsen, 1996; 神谷, 2003)	・トラウマ記憶の不随意的想起(フラッシュバック)と出来事の示差性、感情強度等との関連。(Berntsen, 2001) ・不随意的想起の加齢に伴う変化。(Berntsen & Rubin, 2002)		・5年以上前にトラウマを経験した人と、最近経験した人でトラウマの不随意的記憶を比較。(Berntsen, 2001)
高齢者の回想	・人生の語りの類型化。(山口, 2000)	・回想機能尺度の開発と、加齢やパーソナリティ変数との関連。(Cully et al, 2001; Molinari et al, 2001; Webster, 1997) ・回想の量や質と適応との関連。(野村・橋本, 2001; 長田・長田, 1994; Taft & Nehrke, 1990)	・回想法実施前後の変化。(黒川, 1994, 1995)	・同一性達成度による、語りの構造の違い。(野村, 2002)
再構成	・結婚生活に関する聴きとりに現れた再構成的想起。(Erikson et al, 1986) ・語り手と聴き手の親密化に伴って語られる内容が変化する。(小林, 1992) ・結婚生活に対する満足度を想起。10年前の満足度を現在よりも低く想起する。(Karney & Coombs, 2000)	・生理に対する不安の強い女性ほど、最近の生理を不快に想起。(McFarland et al, 1989) ・O.J. シンブソン裁判の結果について、現在の評価と判決当時の想起との関連。(Levine et al, 2001)	・内向性/外向性が成功と結びつくことを教示すると、被験者はそれに合致した記憶を想起。(Sanitiosso et al, 1990) ・「学習スキルを高める」コースを受講した大学生は統制群に比較すると、過去の自分のスキルを低く想起。(Conway & Ross, 1984)	・抑うつ群、元抑うつ群、コントロール群で、両親の養育態度に関する想起を比較。(Lewinsohn & Rosenbaum, 1987)
フォールスメモリー	・偽りの記憶症候群。(Loftus, 1993)	・フォールスメモリーを構成しやすいパーソナリティ特性の検討。(Hyman & Billings, 1998)	・教示(イメージ生成等)がフォールスメモリーの形成に及ぼす影響を検討。(Hyman & Pentland, 1996; Mazzoni et al, 1999)	
感情・トラウマ・抑うつ	・収容所体験の40年間にわたる忘却。(Wagenaar & Groeneweg, 1990) ・海難事故生存者の記憶の妥当性。(Thompson et al, 1997)	・トラウマが深刻であるほど、その記憶は精緻ではない。(Revierie & Bakeman, 2001) ・侵襲的記憶と鬱の関連。(Brewin et al, 1998)	・気分一致効果(Salovey & Singer, 1989) ・快エピソードと不快エピソードの想起率(再想起率)の比較。(神谷, 1997) ・「自己に注意を向けさせる」より「注意をそらさせる」教示を与えることで、鬱の患者でも、自伝的記憶のネガティブさが低減する。(Lyubomirsky et al, 1998)	・トラウマ歴を有する人と有しない人の、自伝的記憶(精緻化度)の比較。(Revierie & Bakeman, 2001) ・うつ状態、ストレス障害、PTSDと記憶の概括性や侵襲性との関連。(Brewin, 1998; Harvey et al, 1998)
フラッシュバルブ記憶	・フラッシュバルブ記憶。(Brown & Kulik, 1977) ・フラッシュバルブ記憶の正確さ。(McCloskey et al, 1988; Wright et al, 1998)	・重要度や感情反応とフラッシュバルブ記憶との関連。(Conway et al, 1994)	・質問の順序がフラッシュバルブ記憶の想起に及ぼす影響。(Wright et al, 1997)	・人種による比較。(Brown & Kulik, 1977) ・居住地域・人種・ジェンダー・社会的階層による比較。(Wright et al, 1998)
脳	・脳損傷の事例研究。(Hodges & McCarthy, 1993)		・想起内容による脳の活性化の違いをPETやfMRIで検討。(Conway et al, 1999; Maguire, 2002)	・脳損傷患者と統制群で、日常的な活動の実行手順を記述する際に、どのような自伝的記憶に依存しているか検討。(Dritschel et al, 1998)

かを検討した。その結果、自殺未遂群では自伝的記憶の概括性が高く(具体的な内容を想起しにくい)、かつ社会的問題解決課題において有効な解決方法を思いつきにくいことが示された。このことは自伝的記憶が類似の場面の問題解決に類推的に活用され、指示機能を発揮することを示唆している。概括性と問題解決との関連を検討した研究では、抑うつ傾向の高い人を被験者として、統制群と比較することが多い。しかしこうした問題を抱えていない人を対象としても、自伝的記憶の想起を促す条件と促さない条件を設定して社会的問題解決課題の成績を比較し、自伝的記憶の機能を検討することは可能だろう。

また高齢者の回想というテーマでも、自伝的記憶の機能に関する知見が重ねられている。ここでは、回想機能尺度(回想することにどのような意味があるかを検討する尺度)が開発され、年齢や高齢者のパーソナリティ変数等との相関が検討されている。例えば、「過去を回想することは他者に情報を伝えるのに役立つ」という意識は、若年よりは中高年層に強く認められ(Webster, 1997)、アタッチメント・スタイルや外向性と関連している(Molinari, Cully, & Kendjelic, 2001)。

3. 折衷主義と研究の妥当性

表 1-1 は決して、自伝的記憶の研究テーマを網羅したものではない。また研究方法の分類も、これ以外にあり得るだろう。しかし表 1-1 や「構造」と「機能」の研究例で示したように、どのテーマについても、複数の研究方法からアプローチが可能なこと、逆に言えば、どのテーマについても、単一の方法に依存した研究では不十分なことが了解されるだろう。このことは、研究の妥当性にも関わる問題である。

(1) 内的妥当性と外的妥当性

実験的な処置が有意な効果を及ぼし、それが剰余変数では説明できないとき、その実験は内的妥当性を有していると言われる。また実験結果が、そこでの手続きや被験者を超えて一般化

できるとき、その実験は外的妥当性を有していると言われる(Campbell, 1957)。内的妥当性を「その研究から得られた結論(解釈)のもっともらしさ」、外的妥当性を「その研究で得られた結論(解釈)の一般化可能性」と考えるなら、これら二つの妥当性は実験研究のみならず、準実験でも相関的研究や記述的研究でも問題になる。

(2) 自伝的記憶研究の「妥当性」

実験において内的妥当性を達成するには、剰余変数を統制することが必要不可欠である。実験室的記憶研究では、記銘材料の有意味度等が統制され、材料の等質性が保証された上で、研究者が操作した変数の影響が検討される。一方自伝的記憶研究では、記憶内容は研究者ではなく被験者の側にある。そのため例えば「椅子」という手がかり語に対して、ある人からは「小学校の木の椅子を思い出しました」、別の人からは「昨年、家族で旅行した時に、公園のベンチで休憩したことを思い出しました」と、鮮明度も具体性も大きく異なる回答が得られて、分析に苦慮するということが起きてしまう。

それでは、このような状況で内的妥当性を達成するには、どうすればよいだろうか。一つには、「統制にとことんこだわる」という方向が考えられる。例えば想起を求める際に、*"a unique, specific event, from the person's own life, lasting no more than a few hours"* (Wright & Nunn, 2000, p.481) という具合に、非常に厳しい制約を課すのである。あるいは「その出来事をこれまでどのくらい想起しましたか？」と想起頻度を問い(例：Conway, Anderson, Larsen, Donnelly, McDaniel, McClelland, & Rawles, 1994)、これを制御変数として分析に組み込むのである。

しかし前者の場合では、得られた想起がこの基準を満たしているか否か確認するのは非常に困難である。*"unique, specific"* の基準は被験者によって異なるだろう。報告内容はこの基準に合致していても、それは曖昧な想起内容を課題にあわせて精緻に記述した結果かもしれない。

また後者の場合，想起頻度の正確さは想起内容の正確さ同様に判断が難しい。このように考えると，とことん統制にこだわるのは「労多くして益少なし」ということになりかねない。

そこで外的妥当性の助けを借りることを提案したい。すなわち，ある研究から得られた結論が他の研究の結論と整合性が高ければ，それらの研究は「研究群」として妥当な知見を提供していると考えるのである。この場合，内的妥当性と外的妥当性を明確に区別していないため，大括りに「妥当性」と表現する方が適切だろう。あるいは様々な手法を用いた研究群からの証拠が収束して (convergent evidence)，自伝的記憶に関する妥当な (もっともらしさの高い) 推論をもたらすという意味で，測定の妥当性になぞらえて，「収束的妥当性 (convergent validity)」と呼べるかもしれない。先に紹介した「自伝的記憶の指示機能」の研究は，研究群としての収束的妥当性を示している (注 2)。

筆者はこれまで「現象の記述や相関的な研究を経て，実験的な研究に至ってはじめて，物事の因果関係が解き明かされ，モデルや理論が構築される」という意識を強く持っていた (図 1-1)。しかし，統制の難しさや，実験に収まらないテーマも多いという自伝的記憶研究の事情を考えると，研究群としての収束的証拠を収集し，そこから自伝的記憶に関する妥当な結論を導くことが，研究を進める上での一つの現実的で望ましい方向ではないかと思われる。記述・相関分析・実験等，様々な手法からそれぞれにモデルや理論を構築し，それら一連の研究群から妥当な推論が得られたとき，そこに自伝的記憶の全体像が浮かび上がるであろう。

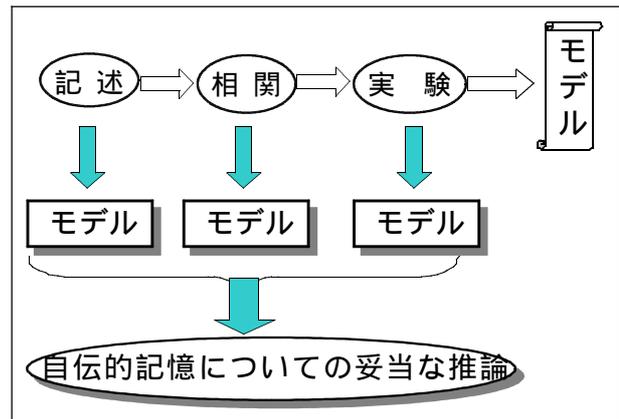


図 1-1 記述研究・相関研究・実験研究からの収束的証拠の必要性

(注 1) 当時の言語学習研究者たちが，こうした限定された手続きと材料で記憶の一般法則を明らかにできると信じていたかどうかは，定かではない。研究手法にあわないうテーマや現象にはそとと蓋をして，いつのまにか，蓋をしたことを忘れてしまっていたのかもしれない。

(注 2) もちろん筆者は，群としての妥当性が高まるなら，個々の研究は統制を放棄して構わないと主張しているのではない。最初から統制を放棄した杜撰な研究では，現象の再現可能性すらも危ういからである。再現性の高い頑健な現象が無ければ研究は進展しない。その一方で，余りに厳密な統制を課すと，被験者からの反応 (想起) をすくい上げることが困難になってしまう。このジレンマを解決する一つの方法が，収束的妥当性の追求である。

2 自伝的記憶実験の「難しさ」

東京家政大学文学部 越智啓太

1. 問題

自伝的記憶研究は「自伝的記憶」という特殊なものを扱っているように見えるが、そのゴールは、別に特殊なものではなく、人間の記憶メカニズムを理論的に明らかにするというものであり、他の記憶研究と同様である（Brewer, 1996）。しかし、他の記憶現象に比べて、自伝的記憶についてのモデルは、あまり作られていない（統合的なモデルとしては、Conway (Conway, 2000)とRubin(Berntsen & Rubin, 2004)のものくらいであろうか。しかし、これらのモデルが検証可能なモデルか否かには議論があるところだろう）。また、理論的な研究というものは実はそれほど多くない。なぜであろうか。

その一つの原因は、自伝的記憶研究は、実験が困難だからである。自伝的記憶は一見すると、だれでも簡単に実験できるようなテーマであるように思われる。質問紙やインタビューで人に「思い出」を聞けば、それ自体でひとつの実験になってしまうような「お手軽」な要素があるからだ。そして、実際、学会発表レベルでは、このようなお手軽な研究はいくつも存在する。しかし、このようなお手軽で、「探索的」な研究が何らかの有効な知見を提供することはきわめてまれだ。そこで、真剣に、仮説を立てて研究してみようとする、そこには、いくつもの障害が立ちふさがってくるのである。そこで、本論では、いくつかの自伝的記憶研究を行い、なかなかうまくいかなかった私の経験から、自伝的記憶研究の「難しさ」についてコメントしてみようと思う。

2. 自伝的記憶「実験」の基本的な「難しさ」

これは、よく指摘されることであるが、自伝的記憶研究の第1の難点は、それが、きわめて

「個人的な」ものを扱う領域であるため、実験の実施がさまざまな制約によって行えなかったり、制限される場合が多いという点である。とくに、その想起内容を問題にする場合には、直接、プライバシーの問題にかかわってくる。これは困ったことに被験者が実験に真剣に取り組めば、取り組むほど顕在化してくる問題である。

例えば、うつ病者やうつ傾向の被験者の自伝的記憶は、このような傾向を持たない人に比べて、バイアスがかかるという現象が存在する。想起内容がうつのようになったり、うつ的な記憶の想起スピードが速くなったり、またその記憶の内容が抽象的になるのである。(Williams, 1996)これは、非常に興味深い現象であり、自伝的記憶システムを明らかにするための重要な手がかりの一つになると思われる。しかし、これを実験的に検討しようとする、うつ的な傾向を持つ被験者に、このような記憶を想起させることや、また、それを報告したり記述したりする必要が出てくる。これは、被験者のプライバシーに関わる問題であり、また、「思い出したくない記憶」を強いて思い出させる研究となってしまう。また、うつの人にうつ的な記憶を想起させることが治療的に問題がないとはいえないであろう。むしろ、トラウマ記憶を開示することによる治療効果(Pennebaker, 1997)について言及されているが、このような一般的な傾向が存在することと、ここにいるあるひとりの被験者に悪影響をあたえる可能性とは全く別の問題である。そして、多くの場合、自伝的記憶の研究者は精神科医でも、臨床心理士でもないため、このような影響に最後まで責任を持つことはできない。

第2に、自伝的記憶はその真偽を判定する客観的な証拠が得られない場合が多いという点がある。たとえば、被験者に子供の頃の記憶などを想起させて報告させたとしよう。この場合、

その記憶が「正確な記憶」なのか、そうでないのかを決めることはなかなか困難である。近年、催眠や誘導などによって、偽の記憶が作られることがあると指摘されている(e.g., Hyman, Husband, & Billings, 1995; Loftus, 1993)。また、実際には、自分が体験した瞬間は記憶しておらず、その後、写真などをみながら、両親などが話した内容を「自分が体験したかのように」記憶しているということも考えられる。これは、情報源のアムニジア現象である。このような問題を解決するために、両親や兄弟からその「思い出」についての証言をとり、それらをつきあわせてみるといった手法が使用される場合が多い(e.g., Usher & Neisser, 1993)。しかし、これらの報告が正しいという証拠は何もないし、また、このような記憶の多くは、両親や兄弟と本人との相互作用の中で生み出されているために、たとえ一致しても、その双方が誤っている危険性もある。このようなことから、古い自伝的記憶の報告の正確性を明らかにすることは事実上、不可能である、

第3に、これは第2の論点とも重なっているが、自伝的記憶現象は、基本的に、きわめて長期な現象であるということである(逆に言えば、自伝的記憶を定義する重要な要素がこの保持の超長期性にある)。そのため、その忘却や変形を追っていくためには、非常に長期間にわたる研究が必要になる。たとえば、ある自伝的記憶の忘却曲線を描こうとすれば、10年、20年と長期間かかってしまう。このような点から、実際には、回顧的な研究が行われているが、それらは基本的には、過去のことを主観的に報告するというバイアスがかかってしまうのである。

しかし、研究者たちはさまざまな工夫を行うことで、このような困難を乗り越えるための有効な実験手法を開発してきた。例えば、被験者のプライバシーを侵さないために、自伝的記憶は想起させるが、その内容自体は報告させず、その記憶のさまざまな属性のみを評定尺度(感情価、モダリティ、年代、鮮明さなど)で回答させるというテクニック(e.g., 越智・太田, 1995)や、

自伝的記憶想起の検索をさせ、その検索にかかる反応時間を従属変数にするもの(e.g., Williams & Broadbent, 1986)、自伝的記憶を想起させたあとに行わせる別の記憶課題への干渉効果の大きさを従属変数とする方法(e.g., Klein & Loftus, 1993)などである。けれども、ここで、もうひとつの問題に突き当たることになる。それは、苦勞して開発された実験でも、再現性がなかったり、現象にとらえどころがなかったりするということである。次にこの問題について述べてみよう。

3. 再現可能性に問題がある

自伝的記憶実験

まず最初に、再現性の問題である。自伝的記憶の実験の中には、再現性の高い現象もいくつか存在する、たとえば、バンプの問題(Rubin, Wetzler, & Nebes, 1986)や最初期記憶の年齢(Dudycha & Dudycha, 1933; Gordon, 1928; Potwin, 1901; Waldfoegel, 1948)などはだれがやっても同じような結果になる。また、最初期記憶の年齢は、男性よりも女性のほうが昔の年齢を報告することなど、原因は全くわかっていないものでも、多くの研究で同じ結果が出る現象(Dudycha & Dudycha, 1933; Gordon, 1928; Howe, Siegel, & Brown, 1993; Potwin, 1901; Waldfoegel, 1948)もある。ところが、実際には、多くの現象、そして、おそらく、興味深い現象の多くは、たとえ教科書に載っているような現象でも、再現することが困難である。

たとえば、Nigro & Neisser(1983)によって提唱された「自伝的記憶の視点」の問題についてみてみよう。これは、自伝的記憶をイメージ化するときの視点が、記憶の内容によって異なるという現象である。彼らは、自伝的記憶の視点を自分の目から見たような形で想起されるような「視野」視点と、第三者の目から見たような形で想起される、つまりその記憶の中に自分自身が存在する「観察者」視点に分けて、どのような要因がこれらの視点を、わけるのかについて実験的に検討した。その結果、感情がたか

ぶっており、かつ注意が自己に向いた場合に、観察者視点になるということが結論づけられた。この現象は自伝的記憶の諸現象の中でも最も興味深い現象の一つであると思われるし、実際に多くの教科書の中に現れる現象でもある。

しかし、Nigro らの論文をあたってみると、まず、実はこの実験はきわめて回りくどい方法で、実験されており、かつ、さきあげた結果は、出てきた実験結果を単に、事後的に解釈したもののように感じられる。この現象をシンプルに再現するためには、単に、さまざまな状況をあげ、その状況の「感情喚起」度や「自分への注意」度を評定させるとともに、そのような状況に置く自伝的記憶を想起させ、その、視点について調査して、それらの関係を見ればよい。しかし、現実にこのような手続きで実験し

表2-1 想起された状況と想起の「視点」、評定値

状況	「視野」視点	「観察者」視点	自分への注意度	感情喚起度
事故怪我	39	31	3.80	3.77
ホラー	40	28	2.68	3.60
ニュース	37	32	2.11	2.09
ランニング	35	35	4.00	3.32
逃げる	27	34	3.73	4.71
わざと披露	24	39	2.95	3.32
大勢発表	30	39	4.40	4.18
グループ	21	48	3.47	3.18
好きな異性	38	27	4.17	4.45
口げんか	38	31	4.06	4.95

「視野」視点・「観察者」視点の欄の数値は、それぞれの解答をした被験者数を示している(N=70)。評定値はいずれも7段階である。それぞれの状況で「自己に注意が向いている度合い」について、「非常に向いている(7)」～「全く向いていない(1)」で評定させた。また、「感情・情動が喚起された度合い」について「表示に喚起された(7)」～「全く喚起されない(1)」で評定させた。

表2-2 想起された時期と想起の「視点」、評定値

状況	「視野」視点	「観察者」視点	自分への注意度	感情喚起度
一番古い	18	14	2.56	2.71
小学校	19	15	3.41	3.38
中学校	21	13	3.82	3.76
大学	17	17	3.26	2.94

「視野」視点・「観察者」視点の欄の数値は、それぞれの解答をした被験者数を示している(N=34)。評定値は7段階で、評定方法は表2-1に準ずる。

てみると、Nigro らの結果が再現されるケースはあまり(ほとんど?)ない。以下に、最近、私が行ったこの研究の結果を示すが、すこし甘めに検討してみても、彼らの結果は再現されていないことがわかる(表2-1:越智, 2003)。たとえば、や は、上記のような条件を満たしているが、自分の視野として記憶が想起されているし、 は満たしていないが、観察者視点として想起されている。(ちなみに、各状況は、事故や怪我をした瞬間、ホラー映画を見ている、テレビニュースを見ている、部活動や体育の授業でランニングをしている、怖い場所や状況から逃げる、友人などの前で熟達した技や能力を見せる、大勢の前で発表する、グループで演劇、合唱や発表などを行う、好きな異性とあっている、親と口げんかしている。)

また、Nigro らは、記憶が昔になるほど視点は、観察者になるという、これも興味深い説を呈示している。そこで、上記の実験と同様のパラダイムで行った研究で大学生の被験者に大学から一番古い記憶まで想起させ、その視点について調査したところ、表2-2に示す結果になった(越智, 2003)。やはり、好意的に解釈しても、Nigro の説は再現されない。

4. とらえどころのない自伝的記憶実験

次に突き当たる問題として、研究を深めていくのが困難であるというものがある。心理学の実験は、最初の実験では比較のおおざっぱな要因を取り扱い、次第に、詳細な要因について分析していくという方向のものが多し。しかし、自伝的記憶研究は、最初のおおざっぱな研究はうまくいくが、条件を詳細にしていくと、個人差や分散の中に現象が次第に埋もれていき、見えなくなってしまうということにしばしば突き当たる。この現象に関しても具体的な事例で見よう。

Reiser, Black, & Abelson (1985)は、自伝的記憶の構造を明らかにするために、その構造化の基礎レベルを明らかにしようとする実験を行った。彼は、自伝的記憶構造の基礎レベルが、「活

動」, 例えば「床屋に行った」, にあるのか, それとも「一般的行動」, 例えば「勘定を払う」にあるのかを確認する実験を行った。具体的な手続きは, 次の通りである。被験者には活動と一般的行動の2つのキューが継時的に与えられ, 被験者は, その両方のキューにあてはまる自伝的記憶を想起することが求められた。具体的には, さきの例で, 「床屋に行って勘定を払った」記憶を想起することが求められたのである。このとき, 被験者には次のようにしてキューが与えられた。まず, ある被験者には「一般的行動」についてのキューが与えられ, しばらく時間をおいて, 「活動」のキューが与えられた。別の被験者にはこの反対で, 「活動」のキューが与えられてから「一般的行動」のキューが与えられた。なぜこのようなことが行われたかというところ, もし, 「活動」が基本的なレベルだとすれば, 「活動」「一般的行動」の条件では, 活動キューが与えられた時点で, 自伝的記憶の検索がスタートできるが, 「一般的行動」が基本的なレベルだとすると, 活動キューが与えられただけでは, 検索がスタートできず, その結果, 2番目のキューが与えられてから, 自伝的記憶を検索するので, 結果として2番目のキューが与えられて

表2-3 Reiser et al. (1985) の実験における自伝的記憶想起の反応時間

呈示順序		平均反応時間(秒)
活動	一般的行動	4.16
一般的行動	活動	6.38

表2-4 Barsalou (1988) の実験における自伝的記憶想起の反応時間

呈示順序		平均反応時間(秒)
活動	人物	3.14
人物	活動	2.98
活動	場所	2.58
場所	活動	2.88
活動	時期	2.92
時期	活動	2.63
人物	場所	3.52
場所	人物	2.89
人物	時期	3.26
時期	人物	3.95
場所	時期	2.58
時期	場所	3.16

から記憶を想起するまでの反応時間が前者の条件よりも長くなってしまおうと考えられるのである。むしろ, 「一般的行動」が基本レベルであるとするこの結果は逆になると考えられる。この実験を実際にやった結果が表 2-3 に示されている。この表を見ると, 活動 一般的行動の反応時間は, 一般的行動 活動の反応時間よりも2秒以上も速くなっており, これから自伝的記憶の基本的なレベルは, 「勘定を払う」といったような一般的行動でなく, 「床屋に行く」といったような活動であることがわかった。ちなみにこの実験は, 被験者さえ十分の数をとれば(しかし, 実際にこの実験を行ってみると, 反応時間の分散はきわめて大きく, 2桁の被験者では, 有意な差を検出するのはなかなか難しい), 十分再現可能である。

この Reiser らの研究は, 自伝的記憶の構造を考える上では, 非常に興味深い実験であり, 意義ある研究のスタート地点になるものである。では, この実験を元にして研究をどのように進展させていけばいいのであろうか。心理学の研究の常套手段は, 一般的な行動と活動というおおざっぱな分類でなく, より細かな分類でこの実験を行い, より詳細なモデルを構築していくというものである。実際に, このような方法での研究の進展が図られた。まず, Conway & Bekerian(1987)は, Reiser のあげたもの以外にも, 「大学時代」や「高校時代」といったキューも第1キューとして記憶検索時間を短縮する効果を持っていることを明らかにした。ところが, 進展はここまでであった。Conway らの実験よりも条件を細かくしていくと結果が全く混沌としてくるのである。例えば, Barsalou(1988)がさまざまなキューを用いて行った実験を, 表2-4 にあげるが, ここでは, 各キューワードごとにほとんど差がなくなってしまう。

興味深いことに, Barsalou の結果を見る限り, Conway の見いだした結果も十分に再現されていない。このように, ある実験の発展系の研究をしようとする場合, 第1の実験自体はうまくいくし, 再現性もあるのだが, それ以降の研究

が続かない、結果が出せないという現象が生じることがある。この場合、そのパラダイムでの、研究の進展はストップしてしまうことになる。Reiser の研究パラダイムもその例であり、Basalou 以降研究はほとんどおこなわれなくなってしまった。ある現象を突き詰めていくと次第に、現象自体がとらえにくくなっていくということは実は心理学の実験では、たびたび生じることである。しかし、自伝的記憶の研究では、この「とらえにくくなる」段階が早く来すぎるのである。つまり、第1の実験はうまくいくが、第2の実験や第3の実験ですぐに、行き止まりになってしまうのである。

5．事後解釈の容易さ

ただ、注意しなければならないのは、自伝的記憶研究というのは身近な現象で、かつ、自伝的記憶というものが比較的多い情報量を持っているということである。そのため、ある仮説を検証するために実験し、その仮説がたとえ検証されなくても、実験結果をじっくりと眺めていけば、なんらかの傾向性が「見えてくる」こともある。というか、じっくりデータを見さえすれば、ひとつくらいは何かの傾向が、見えてくるのが普通である。実験結果の「事後解釈」はこの種の実験ではきわめて容易なのである。実はこの「事後解釈」の容易性が、自伝的記憶研究をさらに混沌としたものにしてしまっている可能性がある。つまり、ある仮説の元で実験を行う その仮説は検証されず ただし結果の事後解釈からべつの仮説が導かれる その仮説の元で実験を行う その仮説は検証されず ただし結果の事後解釈からべつの仮説が見いだされる、という表面的なループを形成してしまい、研究がいつこうに深くなってこないという現象が作られてしまうのである。

6．では、どのように研究を進めていくべきか

以上、実験的な研究を行う上でのさまざまな「困難さ」をあげてみた。では、どのような形

で自伝的記憶の知識を増やして理論化をすすめていけばいいのだろうか。私は個人的には、心理学はあくまで、実験を主として研究を行い、仮説検証的な方法論でモデルを作っていくべきだと思っている。しかし、このような伝統的な実験心理学的な手法のみではやはり、自伝的記憶という実態をつかんでいくのは難しいのではないのか、という実感も生じているのは事実である。そのため、伝統的な実験パラダイムにとらわれずに、準実験計画や調査、インタビュー、伝記研究などを組み合わせて「外堀から埋める」方式で徐々にこの現象を浮き上がらせていくしかないのではないか。その場合、必要なのは、新しい方法論や、新しい実験調査パラダイムを開発し、その結果を報告し、知識を集積していくことであろう。

3 日誌法による自伝的記憶研究

南山大学 神谷俊次

1. 日誌法とは

日誌法とは、仁平（1999）によれば、ある特定の出来事を、日常生活の中でそれが生じたときに要因となる可能性のある状況を含めて本人が詳細に日々記録していく方法である。自伝的記憶に関する日誌法研究では、研究者自身が観察記録者となる場合 (Linton, 1975, 1982; Wagenaar, 1986, 1994; White, 1982, 1989, 2002) と研究協力者に記録を依頼する場合 (Betz & Skowronski, 1997; Brewer, 1988; Burt, 1992a, b; Burt, Kemp, & Conway, 2001; Larsen, 1992; Thompson, 1985; Walker, Vogl, & Thompson, 1997) がある。日誌法は、研究対象とする行動を自然な状況下でありのままに観察するという点で自然観察法と似ている。ただし、自然観察法のように、第三者が観察記録をするのではなく、観察対象となる人自身が記録を行う点で典型的な自然観察法とは異なる。以下に、研究者自身が自らを観察対象とした自伝的記憶研究の代表的なものを見てみる。

Linton (1975) は、毎日 2 ~ 3 個のエピソードを 5 年間にわたり日誌に記録した。記録される出来事の基準としては、他の出来事と区別できるユニークな出来事であった。出来事の内容は 180 文字以内で記述され、さらにその出来事に関して、弁別可能性、感情度、重要度、日付同定性、系列性、系列の長さ、リハーサル可能性が評定された。

White (1982) は、毎日 1 つのエピソードを 1 年間記録した。出来事は、まれな出来事から平凡な出来事、重要な出来事からつまらない出来事まで幅広く記録された。また、出来事に関する頻度、自己関与の程度、鮮明さなどの評定が行われた。

Wagenaar (1986) は、1 日に 1 つのエピソード

を 6 年間にわたり記録していった。彼は、出来事を“自分の人生の中のことで、誰、何、どこ、いつを基礎として判断されるもの”と定義して、記録する時点でそれまでに生じたすべての他のことがらから十分に区別できるユニークな出来事を、いつ、どこで、誰と、何を、の 4 側面から記録した。出来事に関する評定は、顕著度(珍しさ)、快 - 不快度、感情喚起度について行われた。

以上のような日誌法による自伝的記憶研究には、いくつかの共通した特徴が認められる。まず、その日の出来事の中から一定の基準に基づいて 1 つないし 2 つ程度の出来事を被験者自身が選択して記録していく点である。記録することがらとしては、出来事の内容とともにいくつかの観点から出来事に関する評定がされる。したがって、いわゆる日記のように自由にその日の出来事を書くだけではない。出来事の内容の記述にあたっては、出来事の詳細さに差が生じないように記述する文字数や行数に制限が加えられたり、内容の記述には出来事に関する感情的反応を加えないといった制限が加えられる。また、出来事に関する各種の評定は、研究目的によって幾分異なるが、感情喚起度、快 - 不快度、重要度、頻度(珍しさ)などが評定の観点として一般的に用いられる。

2 つめの共通した特徴として、日誌法では、通常、出来事の記録後、数ヶ月から数十年のインターバルをおいて記録された出来事に関する記憶テストが行われることである。出来事の記憶テストは、一般的には、出来事に関する内容の記述が提示され、その出来事を思い出すことができるかどうか調べられる。そして、出来事に関する各種の評定を独立変数として、どのような特徴をもった出来事が保持されているか

が分析される。

このような日誌法による自伝的記憶研究にはいくつかの利点がある。すなわち，“日常生活の文脈における記憶研究が可能になる”，“記録の観点を決めておくことで数量的分析が可能になる”，“記憶テストにおける想起の正確さを日誌の記録内容によって確認できる”といった点である。

一方，日誌法の短所として“記録される出来事を選択が恣意的である”，“出来事を記録すること自体が記憶に影響を及ぼす（精緻的リハーサル，生成効果，自己選択効果）可能性がある”，“1日の出来事の中から特定の出来事が想起された後に記録されるため，出来事の内容や評定が歪む可能性がある”，“記録の観点が定められているために，ある出来事に特有の情報が欠落する可能性がある”といった点を指摘することができる（Thompson, Skowronski, Larsen, & Betz, 1996 参照）。

2．不随意記憶の日誌法による研究

上述の短所を克服するために，一日を振り返って出来事を記録するのではなく，日常生活を営んでいる中で偶発的に想起される不随意記憶を素材とすることが考えられる。不随意記憶とは“思い出そうとする意図なしに意識に上ってくる個人的経験に関する記憶”である。不随意記憶現象については，古くから知られていたが（Salaman, 1982），科学的な研究の対象となったのは最近のことである。不随意記憶は，日常生活の中でほとんど自動的に生起するが，その生起状況を克明に記録していくことによりさまざまな目的の自伝的記憶研究が可能となる（Berntsen, 1996, 1998, 2001; 神谷, 2003, 2004）。

日誌法を不随意記憶の研究に用いることには，次のような利点がある。偶発的に想起された不随意記憶をすぐに記録することによって，記録する出来事を選択の恣意性を排除できる。また，即時記録されるため，自伝的記憶の内容や評定

が歪む可能性が少ない。さらに，被験者に記憶テストを予期させることがないため，出来事を記録することによる出来事の記憶への影響が少ない。

不随意記憶の想起状況を分析することにより，“不随意記憶の生起メカニズム”や“自伝的記憶の体制化”，“感情一致想起現象”などの研究テーマについて追究することができる。また，不随意記憶が想起された後の感情や行動，考えたことを分析することにより，“自伝的記憶の機能”の解明にも役立つと考えられる。

3．日誌法による自伝的記憶データの分析

日誌法で収集された記述データはいわゆる質的データにあたるため，質的データの分析手法（能智, 2004; 澤田・南, 2001）を用いることになる。澤田・南（2001）によれば，“質的な分析は，質的なデータをもとにして，その内容の解釈（意味を読み取ること），分類（似たものを集めること），類型化（タイプ・様式に分けること），概念化（共通の性質を取り出して名づけること）などの作業から構成される”。

不随意記憶に関する“想起契機”，“想起状況”，“想起の影響”などの自由記述データの分析について言えば，どのような観点からの分類が可能であるか，また，そのような分類に意味があるかについて，分類カテゴリと個々の事例との比較照合を繰り返して検討していくことが必要になる。ある観点に基づいた分類では，すべての事例の類型化ができないことが判明すれば，別の観点からの再分類が必要になるであろう。分類の適切さを保障するためには，複数の評定者による判断が有効になる。なお，複数の評定者による判断が難しい場合（たとえば，記述された記録の背後にある意味を読み取るが必要となる場合など）には，観察記録者が時間間隔をおいて繰り返し分類作業を行うことも必要になる。

4. 不随意記憶の機能研究

自伝的記憶には、大きく区分すると以下の3種類の機能があるとされている(Bluck, 2003)。

対人的機能：会話などの対人場面でその状況に応じた自伝的記憶を想起し、それを開示することによって対人関係を発展させたり、維持する役割

行動の調整機能：問題解決場面において、過去の類似した場面での自伝的記憶が想起され、有効であった行動をとるように方向づける役割

自己定義機能：ある個人がどのような人間であるかを規定する役割

神谷(2003, 2004)は、被験者に日誌法によって不随意記憶を記録していくことを求めた。不随意記憶がよみがえったときの状況やそのときの気持ちに関する自由記述データを上述したデータ分析法により整理した結果、表3-1に示した4種類の機能があることが確認された。同一エピソードが複数の機能をもっていることも

しばしば認められたが、自己の確認と対人関係の確認機能をもつエピソードが多いことが明らかにされた。

不随意記憶が想起された契機を分析した結果、人の置かれた状況内のある要素が手がかりとなって、想起された状況と内容的な関わりをもたないエピソードが想起されることが多かった。つまり、不随意記憶は、意図的に想起される自伝的記憶と異なり、そのときの状況にふさわしいエピソードが想起されるわけではなかった。穏やかな気分状態にあるときに、ふとしたきっかけで、その状況のテーマとは一致しないあまり重要ではない過去のエピソードがよみがえってくるというのが不随意記憶の特徴であった。このような不随意記憶では、過去の自分自身や過去に関わりをもった他者のことが想起されることで、ほとんど自動的に自己確認や自分と関わりがあった他者確認が果たされていると考えられる。これらの結果は、不随意記憶には自己を定義する役割があるとともに、自己の同一性

表3-1 不随意記憶の機能とエピソード事例

自己の存在確認：過去のある時点で存在していた自分自身が認識される

例：“Mommy とプリントされたTシャツを着た男子学生を見た”とき、“大学1年生のときに象がプリントされたTシャツを着ていた自分”が想起された。
【想起の影響】子どもっぽい服装をしていたものだと思はれる。

自己の心理的特徴確認：自己の内面的、心理的特徴の確認機能

例：“授業参観で子どもたちが各自の絵を発表したとき発想の豊かさに差があったことを聞いた”とき、“中学校の美術の授業で風景画として鬼瓦だけを描いたら、はじめ馬鹿にしていた教師が完成した絵を見て感心した”エピソードが想起された。
【想起の影響】美術が好きで絵を描くことは得意だったなあ。

対人関係の確認：自分の生活史の中にその他者が存在していたことが認識される

例：“子どもに便所掃除をさせるべきだという新聞記事を読んでいた”とき、“小学校5年生のときのトイレ掃除でA君にトイレブラシをわざとズボンに押しつけられた”エピソードが想起された。
【想起の影響】人の嫌がることを故意に平気でやろうとするA君が信じられないし、そういった人間にはなりたくないと思はれる。

自己の行動調整：想起時点での行動調整機能

例：“洗濯のタグがついたままブレザーを着ようとした”とき、“仕付けをつけたままのブレザーを着ていることを学生に指摘された”エピソードが想起された。
【想起の影響】恥ずかしい思いをしないように、クリーニング後の服を着るときは十分チェックする。

や連続性の感覚を与える機能を担っていると考えることができる。

5．今後の検討課題

日誌法による不随意記憶研究には、心の解明につながる多様な可能性があると思われる。不随意記憶の機能については、類型化・概念化が試行錯誤の結果、それなりに明らかにされたと考えられる。しかし、想起のきっかけについては、未だうまい切り口が見当たらない。不随意記憶には必ず想起契機があるが、この想起契機を分析することが不随意記憶の想起メカニズムや自伝的記憶の体制化の解明に結びつくのではないかと考えられる。

4 子どもはどれくらい幼少期の個人的な出来事を想起できるのか

- 縦断的な事例研究 -

清泉女学院大学人間学部 上原 泉

1. 問題

我々が遡って思い出せる、一番古い（年齢の低い）個人的出来事の記憶の年齢は、想起する年齢にかかわらず（小谷津, 1991; 上原, 1994）、3、4歳前後であることが知られ（Dudycha & Dudycha, 1933, 1941; Rubin, 1982; Sheingold & Tenney, 1982; Wetzler & Sweeney, 1986）、それ以前の出来事について自覚的に想起することは難しい。これは乳幼児健忘と称され（Freud, 1901/1960; Schactel, 1947）、古くから、その原因について論じられてきた。この現象を最初に指摘した Freud (1901/1960) は、乳幼児の時期の記憶が抑圧されているからではないかと主張した。その後、乳幼児と成人の間で経験の符号化の仕方が異なることに原因を見出す説（Winograd & Killinger, 1983）、宣言的記憶が手続き記憶より発達が遅いことで説明がつくとする考え方（Squire, 1987）が提示された。近年では、母子間の対話を通じて子どもが獲得していく語りのスタイル（ナラティブ）の発達と自伝的記憶の形成（歴史的自己の形成含む）に関する説（Nelson, 1996, 2003 他）、自己認識の発達との視点からの解釈（Howe & Courage, 1997 他）、「自分で経験した」という認識の未発達に関する説（Perner & Ruffman, 1995）などが有力なものとしてあげられる。しかし、いずれの説においても、乳幼児健忘が生じる原因解明に直接結びつくような実証的なデータに乏しく、解明には至っていない。これまで、乳幼児健忘に関わる問題を追究するのに、成人に幼児期の出来事を想起させ報告させるという手法を中心に、幼児に数カ月から数年前の出来事を想起させ報告させるという手法が主にとられてきた。だが、これらの手法では、幼児期から成人期にいたる変化の様子を連続的にと

らえられない。このような現状をふまえ、この原因解明には、長期にわたり、同じ個人を追跡し、個々のエピソードをどのように記憶し、後にどう想起するのかをみるのがよいと考えた。これは、子どもがどのように、エピソード記憶や自伝的記憶を形成するようになるのかをも、リアルタイムでみていくことにもなるので貴重な手法だと思われた。このような縦断的調査は、著者の知る限りなされておらず、比較的新しい試みである。

本研究では、上記のような問題意識のもと、同じ対象者を、乳幼児期から児童期まで追跡し、個人的なエピソードの記憶を中心に、調査をすすめている。ここでは、現在も続くその調査結果の一部を、実施方法とともに紹介する（上原, 2002, 2003）。まず、調査1では、各子どもにおいて、エピソード記憶の発達において重要と思われる3つの時期をどのように特定したかと、その3つの時期がおおよそ何歳ぐらいなのかを紹介する。調査2では、個々の出来事の実験時期と想起時期の関係を示すデータを一部紹介し、3つの時期との関係について考察する。

2. 調査1

(1) 方法

【対象者】数カ月に1回の割合で、9組の母子を対象に、乳幼児期から縦断的に、インタビューを実施した。子どもと遊びながら、主に子どもにインタビューや課題を行うセッションと、後で母親中心に聞き取りを行うセッションからなっていた。インタビューの実施場所は、各家庭の要望にあわせ、東京大学駒場心理学研究室、対象者の自宅、著者の自宅のいずれかであった。

【手続きと解析方法】自分が体験したエピソードを自己の体験として想起し語るのにかかわる

能力として3つに注目し、次の3つの時期（(a)(b)(c)）を、各子どもにつき特定した（上原，1998，2001）。その3つの時期とは、(a)「エピソード報告開始時期」：オウム返しではなく、自分の言葉で、過去の文体により過去のエピソードを報告し始めた時期。(b)「再認開始時期」：再認課題ができるようになった時期。ここで再認とは「ある刺激について、過去に見覚えがあるか否か」を質問されたときに、正しく判断し反応する能力と定義した。時期の特定のために行った再認課題の具体的な実施法は次のとおりである。毎インタビュー時に、10枚の絵を子どもに見せ、その約5～10分後に、先に見せた絵5枚を前に見せていない絵5枚とそれぞれペアにして、見たと思われる方を指差させた（強制二肢選択再認課題）。その直後に、先に見せた残りの絵5枚と見せていない絵5枚の計10枚を1枚ずつランダムな順番で見せ、先に見た絵か否かを答えさせた（はい/いいえ型再認課題）。強制二肢選択再認課題とはいいえ型再認課題に正しく答えられるようになる時期に、各子ども内で差がなかったため（詳細については上原（1998）を参照）、再認課題が可能になる時期を一意に特定することができた。(c)「記憶語発話時期」：「覚える」「忘れる」という言葉を、オウム返しではなく自発的に使用し始めた時期であった。なお、3つの時期の特定は、チェックリスト（毎インタビュー時に提出をもとめた）（(a)(c)）、インタビュー中の会話記録（(a)(c)）、インタビュー中の実施課題（(b)）を判断材料とし行った。チェックリストは、主に記憶と言語発達に関する質問からなるものであった。

(2) 結果と考察

自発的に過去のエピソードを語り始めるのは2，3歳頃だが（エピソード報告開始時期）、我々成人が通常行うような再認課題が可能になるのは、3，4歳であることが示された（再認可能時期）。また「覚える」や「忘れる」といった、記憶の意識的想起に関する言葉が出現するのは、ほぼ4歳前後から4歳半頃であることが

示された。各時期に個人差はあるものの、先行研究に引き続き（上原，2001）、発達の順番としておおよそ、エピソード報告、再認、記憶語の自発的発話、という順に現れることが確認できた。エピソード報告が再認よりも先に出現するというのは、一見、不自然に思われるが、2，3歳頃の「エピソード報告開始時期」が、必ずしも「エピソード記憶に基づいた報告が開始する時期」ではないと考えることで、見かけの矛盾は解消される。次に、個々の出来事の経験時期と想起時期の関係を細かく検討し、この3つの時期との関係について考察する。

3. 調査2

(1) 方法

【対象者】調査1の対象者のうちの女儿2人。

【手続きと解析方法】毎インタビュー時に行われる遊び、日常的な印象に残るような出来事（この情報については、チェックリスト、母親へのインタビューを通して得ていた）について、後でどれくらい語ることができるのかを（インタビュー時のおもちゃの経験は主に再認テストにより、日常的な出来事については主に手がかり再生テストにより調べた）、インタビュー時に質問し検討した。インタビュー中の自発的な記憶報告、日常場面で（インタビュー以外の家族との会話の中で）みられた幼少期の出来事に関する発言についても、母親の証言と照らしあわせる、インタビュー中に著者が直接、対象者に詳しく質問するなどして確認した。

(2) 結果と考察

子どもごとに、出来事を経験した時期と正しく想起できた時期の関係を、図に表しまとめた（図4-1、図4-2参照）。5歳前後の早い時期から、3，4歳以前の出来事を想起できないことが伺われる。また、2人に共通しているのは、再認開始時期よりも前に経験した出来事について後々まで語るというケースに、調査者自身、今のところ遭遇していないという点である。

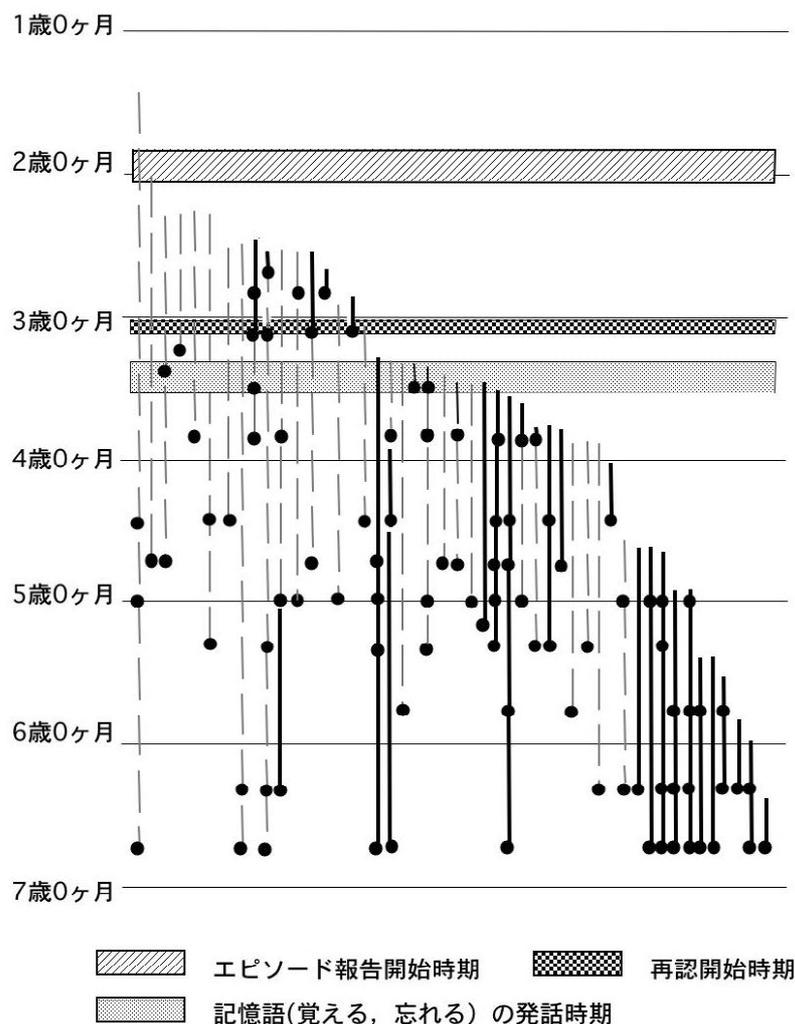


図 4-1：対象者 KN のデータ

上から下に向けての縦方向は、時間の経過を意味する。各々の線（実線、破線）は、個々の出来事の想起の様子を示している。いずれの線も、上から下に向けて書かれており、線の起点が出来事を経験した時点、線の終点と線上の黒点は想起をもとめられた時点を表す。実線は正しく想起できたことを意味し、破線は想起できなかったことを意味する。出来事を経験した年齢と想起の成否の関係がわかりやすいように、左から右の横方向に、経験した年齢が低い出来事順に、線を並べて表現してある。

これは、再認開始時期より前である「エピソード報告開始時期」は、完全に、各子どもがもはや自覚的には想起できない年齢帯に、属していることをも意味する。エピソードを語り始める時期以降に経験したことから、後々想起して語ることができるというわけではないことを示唆する。ただし、再認開始時期や記憶語発話時期が、想起できるか否かの境界年齢に近いとはいえ、これらの能力が直接関わりがあるのかについては不明である。今後のデータ解析と、新たなデータ蓄積により追究していきたい。

4. 全体考察

縦断的調査の実施により、乳幼児健忘は成人になってから生じるものではなく、3、4歳の時期をすぎた幼児期後期には既に生じていることがわかる。エピソード記憶の発達に深く関連すると思われる3つの能力の開始時期と想起の様子を検討した結果、その関係が明らかになったとは言い難いが、「エピソード報告開始時期」は、後になって想起できるか否かの境界年齢よりも前である可能性が高いことが示された。

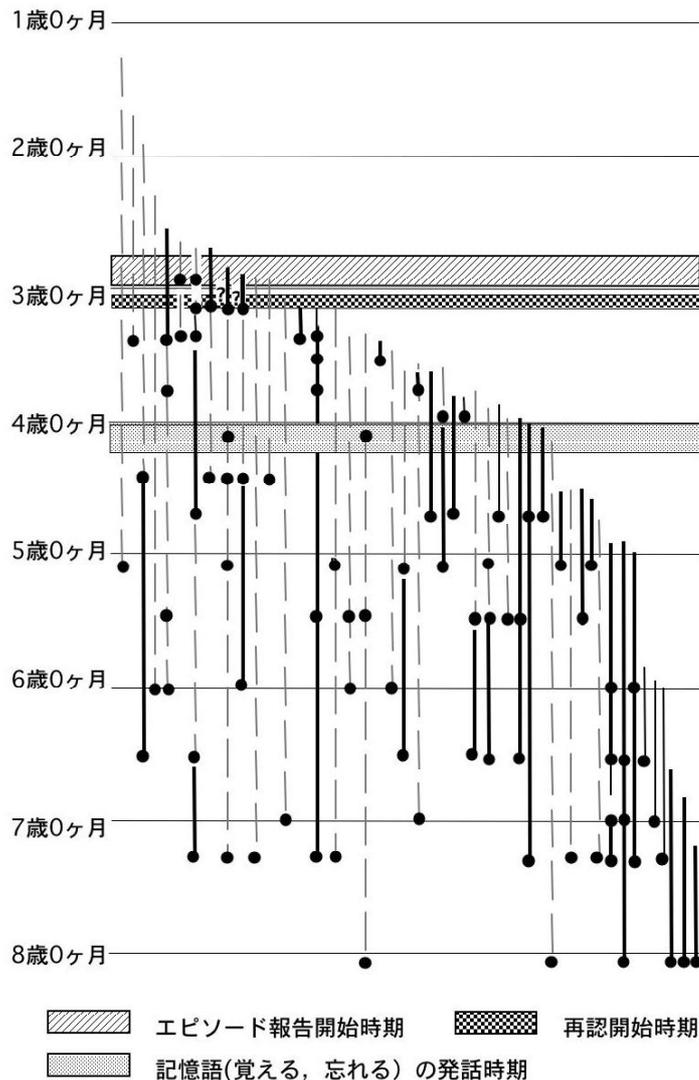


図 4-2：対象者 SA のデータ

上から下に向けての縦方向は、時間の経過を意味する。各々の線（実線、破線）は、個々の出来事の想起の様子を示している。いずれの線も、上から下に向けて書かれており、線の起点が出来事を経験した時点、線の終点と線上の黒点は想起をもとめられた時点を表す。実線は正しく想起できたことを意味し、破線は想起できなかったことを意味する。出来事を経験した年齢と想起の成否の関係がわかりやすいように、左から右の横方向に、経験した年齢が低い出来事順に、線を並べて表現してある。

おそらく、乳幼児健忘に、「エピソードを語る」能力自体は本質的ではないものとする。

ただし、近年、過去の出来事を語る能力（ナラティブ）の発達に乳幼児健忘に関わっている可能性が高いと論じられている（Wang, Leichtman, & Davies, 2000）。確かに、自己の個人的な出来事の記憶（エピソード記憶）、より自分にとって意味のある思い出（自伝的記憶）を語るためには、高度な語り能力が必要である。この能力の発達は、近年いわれているように、母子間の対話を中心に社会的相互作用の積み重

ねにより促されると同時に、この高度な語り能力の発達自体が、より持続的に維持されうるような自己の思い出の形成をも促している側面はあろう。

だが、本調査結果より、過去形で出来事を語るという、純粋な言語能力のみが決定要因であるようには思われない。「エピソード報告開始時期」というより、再認開始時期や記憶語発話時期が、想起できるか否かの境界年齢に近いという結果を得ているからである。言語発達に伴ってすすむ（あるいは促される）もっと広範囲に

わたる認知的な発達的变化を反映しているところ
らえたほうがよいように思う。

今後は、本調査のデータ蓄積と解析をすすめ、
言語的に再認できることが重要なのか、他の要
因が決定要因なのか、あるいは広範囲な認知発
達上の変化がおきているとしたらその変化はい
つどのようにして生じるのかを追究する必要が
ある。乳幼児健忘の解明は、子どもがいつから
自分の過去の出来事を振り返って内省しはじめ、
どのようにエピソード記憶、自伝的記憶を形成
していくのかについて、明らかにすることにも
つながるであろう。

指定討論 - ヒトにとって自伝的記憶はどのような意味を持つのか？

名古屋大学 川口潤

1. はじめに

本ワークショップにおいては、自伝的記憶研究について、いくつかの重要な点が指摘された。まずそれらの点について述べ、その後、他の種類の記憶とは異なる分類として用いられている自伝的記憶は、ヒトの認知の働き、ひいてはヒトの生存にとってどのような意味を持っているのかを考えてみたい。

2. 自伝的記憶研究の現状について

本ワークショップでは以下の点が指摘されたと思う。

まず研究手法の多様性である。佐藤氏(群馬大学)は、代表的な手法として、記述的研究、相関的研究、実験的研究(被験者を無作為にあてるもの、特定の被験者タイプを対象にするもの)をあげている。そして、それらの異なった研究手法を用いていることを自伝的研究のひとつの特徴とし、折衷主義という言葉で表現している。実際、例えば、最も一般的な自伝的記憶検索の手法として、何らかの手がかりから自伝的記憶を想起(再生)してもらおうというものがあるが、それは自伝的記憶の記述的研究ともいえるし、手がかりを実験的に操作することによって、独立変数を操作する実験的研究ととらえることもできる。しかし、これらの手法を「折衷」的に用いること自体は自伝的記憶研究に限ったことではない。例えば、1960年代から研究が進められている、メタ記憶の研究のひとつであるTOT(tip of the tongue)に関する研究では、当初はTOT状態に陥った場合にはどのような情報が検索されているのかという点について「記述的」な研究がなされ、その後、TOTがどのように解消されるかという要因が取り上げられることによって実験的研究が進むようになってきている。しかし、現在でも記述的のデータが捨て

られているわけではなく、いくつかの手法によるデータが収斂することによって、そのメカニズムの解明へ進んでいると考えられる。この意味では、自伝的記憶研究がいくつかの手法を同時に用いて進められていることは欠点ではなく長所であると考えべきであろう。ただ問題は、それらが折衷ではなく収斂するかどうかであるが、それは、自伝的記憶研究のゴールとして何が設定されているかによっており、モデルあるいは理論間の議論という段階が必要であると思われる。この点については、越智氏(東京家政大学)が指摘している。

越智氏は、理論的研究あるいはモデル化を行っていくことが自伝的記憶研究のゴールであり、そのためには厳密な実験的手法の適応が必要であることをあげている。実際、自伝的記憶に関する理論あるいはモデルはConway(e.g., Conway & Pleydell-Pearce, 2000)によるモデルがあるものの、複数のモデル間での議論が綿密に行われている状況にはないように思える。しかし、自伝的記憶研究が単なる記述データの蓄積あるいは個別の理論の乱立に陥らないためには、このようなデータにもとづいた理論間の比較という議論は欠かせない。越智氏は、このような研究の発展には実験的研究が不可欠であり、また自伝的研究がいわゆる実験室の実験が難しいことから、現状に問題が多いことを指摘している。

ただ、実験室における実験的研究が日常的な自伝的記憶の側面を排除してしまうことは避けられず、他の研究には見られない自伝的記憶研究の特徴に着目すれば、その「日常性」に焦点を当てることは、実験的統制の低下というコストを伴ったとしても重要な視点であると考えられる。その意味で、神谷氏(南山大学)が報告し

た日誌法による研究は興味深いものといえる。例えば、日常場面では、「小学校の頃の出来事を思い出してください」という指示のもとに思い出すことはあまりない。つまり意図的に想起することは多くはないことや、自伝的記憶が自己(self)を作り上げている基礎となっていることから考えると(e.g., Conway, Singer, & Tagini, 2004; Tulving, 1993), 自伝的記憶は意図的想起が反映しない部分で大きな役割を果たしている可能性がある。その意味で、神谷氏が述べている日誌法を用いた不随意記憶に関する研究は実験的厳密性についてコストはあるものの、自伝的記憶の特徴に迫る重要な点を探るものだと考えられる。

さらに、自伝的記憶の機能については、自己がどのように形成されてくるのかという発達の問題と深く関係しているであろう。上原氏(清泉女学院大学)は幼児期健忘について縦断的研究を行った興味深い結果を報告している。そこでは、エピソード報告期、再認開始時期、記憶語発話時期というようにイベントの報告に関する能力の発達の变化がみられたこと、3, 4歳で幼児期健忘は生じているものの、それより前の時期にエピソード報告がなされ、エピソードの報告自体は自伝的記憶に本質的ではないことなどが示された。これらの知見は、自伝的記憶の研究という視点だけでなく、記憶そのものの機能的意味を考える上で非常に重要な指摘だと思われる。

3. 何のための自伝的記憶

さて、さまざまな手法による自伝的記憶研究が存在していることが示されたわけであるが、このような研究は何を目指しているのでしょうか。佐藤(2002)は自伝的記憶の研究について、その構造と機能を分けて述べているが、なかでも機能について考えることは、自伝的記憶に限らず、記憶がどのような意味を持っているかをとらえる上で、また今後記憶研究がどのように進んでいくかを考える上で重要な観点であると

思われる。

一般に、自伝的記憶を含め、記憶を考える際にはその分類を考えることが多いが、なかでもエピソード記憶は「体験の記憶」という意味で自伝的記憶と共通点が多い。特に、近年のTulving (2002)によるエピソード記憶の定義は単に時間と場所の情報が付随した出来事の記憶ではなく、自分が過去の記憶をありありと思い出しているという意識(自己参照的意識, auto-noetic consciousness)をともなっていることが重要な要素であると主張しており、それは自伝的記憶の想起と非常に近いといえよう。このような定義は、記憶を想起したときの意識に焦点が当てられていることを反映したものであり、エピソード記憶の想起が単に過去の体験した出来事を思い出しているというだけでなく、再体験しているようなありありとした状態の想起意識をともなっていることを指している。このような想起意識は、別の言い方をすれば、自己が過去の出来事を再体験するという意識であり、彼はそれをメンタル・タイム・トラベル(mental time travel)という言葉で呼んでいるが、記憶というものをよりダイナミックな視点で捉えたものであるといえよう。さらに、このようなエピソード記憶は、進化的なシステムを反映したものと考えられている。エピソード記憶は、PRS(perceptual representation system)や意味記憶よりも上位のヒト固有の記憶システムであり、自己参照的意識をともなうエピソード記憶の想起はヒトという種のみが行うものであるとされる。自己の体験の記憶を3人称的ではなくあくまで1人称として想起するということが、ヒト独自のものであるとすれば、いわゆる「思い出」はヒト独自であるともいえ、このような思い出という自己の体験の想起意識が、他の種には見られない文化や芸術を生み出す元となったと考えることもできる。例えば、やや飛躍かもしれないが、自己の体験の想起にともなう「懐かしさ」という感情はヒト特有であり、芸術作品を生み出すきっかけになったとも考え

られる。このような意味で、エピソード記憶はヒトにとって重要な意味を持っていると考えられている。

エピソード記憶がヒト特殊であるという進化的見方については、多くの議論があるところであるが(e.g., Clayton, Grifitths, Emery, & Dickerson, 2002), このようなエピソード記憶の定義は自伝的記憶の意味するところと重なる部分が多い。Tulving の主張が正しいかどうかは現在では不明であるが、その考え方が記憶の進化といった議論を生み出している現状を考えると、自伝的記憶がヒトにとってどのような意味を持っているかを、例えば進化の視点から考えてみると、自伝的記憶研究の新しい道が見えてくるかもしれない。例えば、上原氏の縦断的発達研究はそのような研究の一つであろう。新しい視点からの今後の研究に期待したい。

指定討論 - 自伝的記憶研究に関する2つの提案

筑波大学 太田信夫

自伝的記憶研究と伝統的な実験室的記憶研究との基本的に異なる点は、2つあると考える。

ひとつは、実験室的研究の多くは、記憶材料があり、それを符号化し、貯蔵し、検索するという3過程がすべて研究対象になるのに対して、自伝的研究の多くは、すでに貯蔵されている記憶を検索することにより研究が進められる点である。すなわち、自伝的研究のパラダイムでは、実験者がある基準に基づいて作成した記憶材料が存在しない点が、実験室的研究との大きな相違点である。本ワークショップで取り上げられた神谷氏の日誌法による研究や上原氏の幼児の個人的出来事の縦断的研究では、符号化時も研究の視野に入っているが、それは実験室における統制された条件での符号化とは異なるものである。

自伝的記憶研究と伝統的な実験室的記憶研究とのこの相違点は、符号化されるものが客観的に決められているかどうかの違いともいえる。さらに別の言い方をすれば、研究対象である記憶内容が、限定されているかどうかの違いでもある。すなわち、自伝的記憶研究では、膨大で混沌としている記憶内容を研究対象としているということであり、この点が自伝的記憶研究の大きな特徴であり、それは同時に、研究のおもしろさと難しさにも通じるものであろう。

自伝的記憶研究を、構造に関する研究と機能に関する研究に大きく分けるとすれば、この特徴は前者に属するものである。

自伝的記憶研究が伝統的な実験室的記憶研究と異なるもうひとつの大きな特徴は、記憶研究の領域にとどまらず心理学の他の領域、あるいは心理学以外の学問とも必然的に関わってくるという点である。この特徴は、前述の自伝的記憶研究の2つの分類のうち、機能に関する研究

を考えれば、自明のことであろう。心理学についていえば、自伝的記憶とパーソナリティ形成との関係の研究は人格心理学、自伝的記憶内容の開示と人間関係は社会心理学、心理療法との関係は臨床心理学、また発達心理学や教育心理学の研究領域でも自伝的記憶研究は扱われている。そして何よりも、現実社会で生きている個人々々を理解するためには、どのような自伝的記憶を持っているかということは、大変重要なことである。もしそれができれば、自伝的記憶研究の視点から、その個人々の価値観、人生観あるいは将来の展望の理解も可能になってくる。このように考えてくると、自伝的記憶の機能に関する研究は、心理学全体に関する研究であり、血の通った、本来の心理学研究であるといえよう。

自伝的記憶研究が伝統的な実験室的研究と比べて、このような2つの基本的特徴をもつとした場合、筆者は、ここで今後の研究方向として、2つの提案をしたい。

まず第1の提案は、自伝的記憶研究の対象が膨大で混沌としている記憶内容であるならば、その構造やメカニズムについて、さらなる理論的検討が必要ではないか、ということである。自伝的記憶といわれる中には、生き生きとしたイメージを伴って思い出せることもあれば、全体的内容がぼんやりとしか思い出せないが、アルバムに写真があったり、何回も他人にその事を話したりしており、確かに自己の行動であるという確信できる記憶もある。この極端な例は、全くエピソード記憶はないが、自己に関する知識として記憶している場合であり、言ってみれば歴史上の人物に対する知識とある意味では同様の知識であろう。膨大な自伝的記憶の中には、さらに、フラッシュバルブメモリのように鮮

明な記憶もあれば、初期記憶のように、自分の記憶なのか家族からの伝聞なのか分からないような、非常にあいまいで微かな記憶もある。このように、自伝的記憶と一口に言っても様々な記憶が考えられ、その構造やメカニズムの原理は、同じではなく異なっているかもしれない。もしそうならば、いつも自伝的記憶をひとつの記憶システムとして考えることは、研究の発展を妨げていることになるだろう。

最近のある論文(Berntsen & Hall, 2004) では、自伝的な不随意記憶では、語手がかり法による自伝的記憶と比較して、より具体的で情緒的な自伝的記憶が思い出されやすいことを示している。これは一例にすぎないが、研究方法により想起内容が異なることは明らかである。したがって膨大で混沌としている自伝的記憶内容を把握するためには、多面的な研究法が必要である。その上で、記憶内容の分類・整理や想起メカニズムの検討がされなければならないと考えられる。

第 2 の提案は、自伝的記憶研究が、特にその機能的側面における研究において、心理学のほとんどすべての領域と関係をもたざるを得ないならば、自伝的記憶研究の観点から、人間に関する科学としての心理学の構成を再編してはどうかということである。そして方法においても理論においても、記憶研究以外の領域の知見をフルに活用し、生きた人間の心理究明に迫れば、この提案の目的は達成されたことになる。

従来の心理学は、実験心理学、臨床心理学、社会心理学等々のような領域に分けられることが多いが、このような分け方とは異なる自伝的記憶研究独自の心理学とは、どのようなものであろうか。筆者も現時点ではよいアイデアがあるわけではない。たとえば「自分づくりの心理」「生きかたの心理」「知恵の心理」など日常用語で表されるような心理学の再編、また「内的情報」「外的情報」「伝達情報」などとあるキーワードに依拠した心理学の構成も考えられるような気がする。いずれにしても、心理学、場合

によっては心理学を越えた広い視野から自伝的記憶研究を考え直すことにより、理論的にも方法的にも、さらなる発展がみられると考えたい、ということが、第 2 の提案の主旨である。このあたりの事がうまく行けば、将来、学際的なひとつの学問分野を形成することも、夢ではない。

【本文中の引用文献】

- Barsalou, L. W. (1988). The content and organization of autobiographical memories. In U. Neisser & C. E. Winograd (Eds.), *Remembering reconsidered: Ecological and traditional approaches to the study of memory*, 193-243. Cambridge: Cambridge University Press.
- Berntsen, D. (1996). Involuntary autobiographical memories. *Applied Cognitive Psychology*, **10**, 435-454.
- Berntsen, D. (1998). Voluntary and involuntary access to autobiographical memory. *Memory*, **6**, 113-141.
- Berntsen, D. (2001). Involuntary memories of emotional events: Do memories of traumas and extremely happy events differ? *Applied Cognitive Psychology*, **15**, S135-S158.
- Berntsen, D., & Hall, N.M. (2004). The episodic nature of involuntary autobiographical memories. *Memory & Cognition*, **32**, 789-803.
- Berntsen, D., & Rubin, D. C. (2004). Cultural life scripts structure recall from autobiographical memory. *Memory & Cognition*, **32**, 427-442.
- Betz, A., & Skowronski, J. J. (1997). Self-events and other-events: Temporal dating and event memory. *Memory & Cognition*, **25**, 701-714.
- Bluck, S. (2003). Autobiographical memory: Exploring its functions in everyday life. *Memory*, **11**, 113-123.
- Brewer, W. F. (1988). Memory for randomly sampled autobiographical events. In U. Neisser & E. Winograd (Eds.), *Remembering reconsidered: Ecological and traditional approaches to the study of memory*, 21-90. Cambridge: Cambridge University Press.
- Brewer, W. F. (1996). What is recollective memory? In D. C. Rubin (Ed.) *Remembering our past: Studies in autobiographical memory*, 19-66. Cambridge: Cambridge University Press.
- Brown, N. R., & Schopflocher, D. (1998). Event cueing, event clusters, and the temporal distribution of autobiographical memories. *Applied Cognitive Psychology*, **12**, 305-319.
- Burt, C. D. B. (1992a). Retrieval characteristics of autobiographical memories: Event and date information. *Applied Cognitive Psychology*, **6**, 389-404.
- Burt, C. D. B. (1992b). Reconstruction of the duration of autobiographical events. *Memory & Cognition*, **20**, 124-132.
- Burt, C. D. B., Kemp, S., & Conway, M. (2001). What happens if you retest autobiographical memory 10 years on? *Memory & Cognition*, **29**, 127-136.
- Campbell, D. T. (1957). Factors relevant to the validity of experiments in social settings. *Psychological Bulletin*, **54**, 297-312.
- Clayton N.S., Griffiths, D.P., Emery, N.J., & Dickerson, A. (2002). Elements of episodic-like memory in animals. In A. Baddeley, M. Conway, & J. Aggleton (Eds.), *Episodic memory: New directions in research*, 232-248. Oxford: Oxford University Press.
- Conway, M. A. (2000). The construction of autobiographical memories in the self-memory system. *Psychological Review*, **107**, 261-288.
- Conway, M., Anderson, S. J., Larsen, S. F., Donnelly, C. M., McDaniel, M. A., McClelland, A. G. R., & Rawles, R. E. (1994). The formation of flashbulb memories. *Memory & Cognition*, **22**, 326-343.
- Conway, M. A., & Bekerian, D. A. (1987). Organization in autobiographical memory. *Memory & Cognition*, **15**, 119-132.
- Conway, M. A. & Pleydell-Pearce (2000). The construction of autobiographical memories in the self-memory system. *Psychological Review*, **107**, 261-288.
- Conway, M.A., Singer, J. A., & Tagini, A. (2004). The self and autobiographical memory: Correspondence and coherence. *Social Cognition*, **22**, 491-529.
- Dudycha, G. J., & Dudycha, M. M. (1933). Some factors and characteristics of childhood memories. *Child Development*, **4**, 265-278.
- Dudycha, G. J., & Dudycha, M. M. (1941). Childhood memories: A review of the literature. *Psychological Bulletin*, **38**, 668-682.
- Evans, J., Williams, J. M. G., O'Loughlin, S., & Howells, K. (1992). Autobiographical memory and problem-solving strategies of parasuicide patients. *Psychological Medicine*, **22**, 399-405.
- Freud, S. (1901/1960). *The psychopathology everyday life*. Republished 1953. In J. Strachey (Ed. and Transl.), *The standard edition of the complete psychological works of Sigmund Freud*, Vol. 6. London: Hogarth.
- Gordon, K. (1928). A study of early memories. *Journal of Delinquency*, **12**, 129-132.
- Habermas, T., & Paha, C. (2001). The development of coherence in adolescents' life narratives. *Narrative Inquiry*, **11**, 35-54.
- Howe, M. L., & Courage, M. L. (1997). The emergence and early development of autobiographical memory. *Psychological Review*, **104**, 499-523.
- Howe, M. L., Siegel, M., & Brown, F. (1993). Early

- childhood memories. *Cognition*, **47**, 95-119.
- Hyman, I. E., Husband, T. H., & Billings, F. J. (1995). False memories of childhood experiences. *Applied Cognitive Psychology*, **9**, 181-197.
- 神谷俊次 (2003). 不随意記憶の機能に関する考察 想起状況の分析を通じて . 『心理学研究』, **74**, 444-451.
- 神谷俊次 (2004). 不随意記憶の機能に関する研究 エピソード想起の影響 . 『日本心理学会第 68 回大会発表論文集』, 773.
- Klein, S. B. & Loftus, J. (1993). The mental representation of trait and autobiographical knowledge about the self. In T. K. Srull & R. S. Wyer (Eds.), *Advances in social cognition, Vol. V: The mental representation of trait and autobiographical knowledge about the self*, 1-50. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
- 小谷津孝明 (1991). 最幼児期記憶の周辺 『イマ - ゴ』, **7**, 89-97.
- Larsen, S. F. (1992). Potential flashbulbs: Memories of ordinary news as the baseline. In E. Winograd & U. Neisser (Eds.), *Affect and accuracy in recall: Studies of "flashbulb" memories*, 32-64. New York, NY: Cambridge University Press.
- Linton, M. (1975). Memory for real-world events. In D. A. Norman & D. E. Rumelhart (Eds.), *Explorations in cognition*, 376-404. San Francisco: Freeman.
- Linton, M. (1982). Transformations of memory in everyday life. In U. Neisser (Ed.), *Memory observed: Remembering in natural contexts*, 77-91. San Francisco: Freeman. (富田達彦訳 (1988). 日常生活における記憶の変形. 『観察された記憶 (上) 自然文脈での想起』, 94-111. 誠信書房.)
- Loftus, E. F. (1993). The reality of repressed memories. *American Psychologist*, **48**, 518-537.
- Molinari, V., Cully, J. A., & Kendjelic, E. M. (2001). Reminiscence and its relationship to attachment and personality in geropsychiatric patients. *International Journal of Aging & Human Development*, **52**, 173-184.
- Nelson, K. (1996). Memory in early childhood: The emergence of the historical self. In K. Nelson (Ed.), *Language in cognitive development*, 152-182. Cambridge: Cambridge University Press.
- Nelson, K. (2003). Self and social functions: individual autobiographical memory and collective narrative. *Memory*, **11**, 125-136.
- Nigro, G. & Neisser, U. (1983). Point of view in personal memories. *Cognitive Psychology*, **15**, 467-482.
- 仁平義明 (1999). ダイアリー法. 『認知研究の技法』, 138-142. 福村出版.
- 能智正博 (2004). 質的データの分析. 『児童心理学の進歩』, **43**, 271-293. 金子書房.
- 越智啓太 (2003). 自伝的記憶想起における「視点」の問題 『日本教育心理学会第 45 回総会発表論文集』, 711.
- 越智啓太・太田誠 (1995). イベントメモリの想起内容 (5) - 最初期・自伝的記憶の感情価分布と検索方略の関連 - 『日本発達心理学会第 6 回大会発表論文集』, 19.
- Pennebaker, J. W. 1997 *Opening up: The healing power of expressing emotions*. New York, NY: Guilford Press (余語真夫監訳 (2000). 『オープニングアップ』 北大路書房.)
- Perner, J., & Ruffman T. (1995). Episodic memory and autonoetic consciousness: Developmental evidence and a theory of child amnesia. *Journal of Experimental Child Psychology*, **59**, 516-548.
- Pillemer, D. B. (1998). *Momentous events, vivid memories*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Potwin, E. B. (1901). Study of early memories. *Psychological Review*, **8**, 596-601.
- Reiser, B. J., Black, J. B., & Abelson, R. P. (1985). Knowledge structures in the organization and retrieval of autobiographical memories. *Cognitive Psychology*, **17**, 89-137.
- Ross, M., & Buehler, R. (1994). On authenticating and using personal recollections. In N. Schwarz & S. Sudman (Eds.), *Autobiographical memory and the validity of retrospective reports*, 55-69. Springer-Verlag.
- Rubin, D. C. (1982). On the retention function for autobiographical memory. *Journal of Verbal Learning and Verbal Behavior*, **21**, 21-38.
- Rubin, D. C., Wetzler, S. E., & Nebes, R. D. (1986). Autobiographical memory across the adult lifespan. In D. C. Rubin (Ed.) *Autobiographical memory*, 202-221. Cambridge: Cambridge University Press.
- Salaman, E. (1982). A collection of moments. In U. Neisser (Ed.), *Memory observed: Remembering in natural contexts*. San Francisco: Freeman. Pp. 49-63. (富田達彦訳 (1988). 瞬間の収集. 『観察された記憶 (上) 自然文脈での想起』, 59-77. 誠信書房.)
- 佐藤浩一 (2002). 自伝的記憶 井上毅・佐藤浩一 (編著) 『日常認知の心理学』, 70-87. 北大路書房.
- 澤田英三・南博文 (2001). 質的調査 観察・面接・フィールドワーク . 南風原朝和・市川伸一・下山晴彦 (編) 『心理学研究法入門 調査・実験から実践まで』, 19-62. 東京大学出版会.

- Schachtel, E. G. (1947). On memory and childhood amnesia. *Psychiatry*, **10**, 1-26.
- Sheingold, K., & Tenney, Y. J. (1982). Memory for a salient childhood event. In U. Neisser (Ed.), *Memory observed: Remembering in natural contexts*, 201-212. San Francisco : W.H.Freeman & Company.
- Squire, L. R. (1987). *Memory and brain*. New York: Oxford University Press.
- Thompson, C. P. (1985). Memory for unique personal events: Effect of pleasantness. *Motivation and Emotion*, **9**, 277-289.
- Thompson, C. P., Skowronski, J. J., Larsen, S. F., & Betz, A. L. (1996). *Autobiographical memory: Remembering what and remembering when*. Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum.
- Tulving, E. (1993). Self-knowledge of an amnesic individual is represented abstractly. T. K. Srull & R. S. Wyer (Eds.), *The mental representation of trait and autobiographical knowledge about the self. Advances in social cognition. Vol.5*, 147-156. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
- Tulving, E. (2002). Episodic memory and common sense: How far apart? In A. Baddeley, M. Conway, & J. Aggleton (Eds.), *Episodic memory: New directions in research*, 269-287. Oxford: Oxford University Press.
- 上原泉 (1994). 幼児期の記憶 - 複数記憶システムの観点から - 1993 年度東京大学文学部心理学専修課程卒業論文.
- 上原泉 (1998). 再認が可能になる時期とエピソード報告開始時期の関係 - 縦断的調査による事例報告 - 『教育心理学研究』, **46**, 271-279.
- 上原泉 (2001). 再認, エピソード記憶, 記憶に関する言葉の発達について 『日本心理学会第 65 回大会発表論文集』, 410.
- 上原泉 (2002). いつ頃まで遡って過去に経験した出来事を報告できるのか? : 新たな縦断的調査法による解明の試み 『日本発達心理学会第 13 回大会発表論文集』, 18.
- 上原泉 (2003). 小学生における幼児期の記憶: 縦断的調査法による事例報告 『日本心理学会第 67 回大会発表論文集』, 806.
- Usher, J. A. & Neisser, U. (1993). Childhood amnesia and the beginnings of memory for four early life events. *Journal of Experimental Psychology: General*, **122**, 155-165.
- Wagenaar, W. A. (1986). My memory: A study of autobiographical memory over six years. *Cognitive Psychology*, **18**, 225-252.
- Wagenaar, W. A. (1994). Is memory self-serving? In U. Neisser & R. Fivush (Eds.), *The remembering self: Construction and accuracy in the self-narrative*, 191-204. Cambridge: Cambridge University Press.
- Waldfoegel, S. (1948). The frequency and affective character of childhood memories. *Psychological Monographs*, **62**, Whole No.291.
- Walker, W. R., Vogl, R. J., & Thompson, C. P. (1997). Autobiographical memory: Unpleasantness fades faster than pleasantness over time. *Applied Cognitive Psychology*, **11**, 399-413.
- Wang, Q., Leichtman, M. D., & Davies, K. I. (2000). Sharing memories and telling stories: American and Chinese mothers and their 3-year-olds. *Memory*, **8**, 159-177.
- Webster, J. D. (1997). The reminiscence functions scale: A replication. *International Aging and Human Development*, **44**, 137-148.
- Wetzler, S. E., & Sweeney, J. A. (1986). Childhood amnesia: An empirical demonstration. In D. C. Rubin (Ed.), *Autobiographical memory*, 191-201. Cambridge: Cambridge University Press.
- White, R. T. (1982). Memory for personal events. *Human Learning*, **1**, 171-183.
- White, R. T. (1989). Recall of autobiographical events. *Applied Cognitive Psychology*, **3**, 127-135.
- White, R. T. (2002). Memory for events after twenty years. *Applied Cognitive Psychology*, **16**, 603-612.
- Williams, J. M. G. (1996). Depression and the specificity of autobiographical memory. In D. C. Rubin (Ed.) *Remembering our past: Studies in autobiographical memory*, 244-267. Cambridge: Cambridge University Press.
- Williams, J. M. G. & Broadbend, K. (1986). Autobiographical memory in suicide attempters. *Journal of Abnormal Psychology*, **95**, 144-149.
- Winograd, E., & Killinger, W. A. (1983). Relating age at coding in early childhood to adult recall: Development of flashbulb memories. *Journal of Experimental Psychology: General*, **112**, 413-422.
- Wright, D. B., & Nunn, J. A. (2000). Similarities within event clusters in autobiographical memory. *Applied Cognitive Psychology*, **14**, 479-489.

【表 1-1 引用文献】

- Anderson, S. J., & Conway, M. A. (1993). Investigating the structure of autobiographical memories. *Journal of Experimental Psychology: Learning, Memory, & Cognition*, **19**, 1178-1196.
- Aschermann, E., Dannenberg, U., & Schulz, A-P. (1998). Photographs as retrieval cues for children. *Applied Cognitive Psychology*, **12**, 55-66.

- Barsalou, L. W. (1988). The content and organization of autobiographical memories. In U. Neisser & E. Winograd (Eds.), *Remembering reconsidered: Ecological and traditional approaches to the study of memory*, 194-243. Cambridge: Cambridge University Press.
- Baveas, J. B., & Johnson, T. (2000). Listeners as co-narrators. *Journal of Personality and Social Psychology*, **79**, 941-952.
- Berntsen, D. (1996). Involuntary autobiographical memories. *Applied Cognitive Psychology*, **10**, 435-454.
- Berntsen, D. (2001). Involuntary memories of emotional events: Do memories of traumas and extremely happy events differ? *Applied Cognitive Psychology*, **15**, S135-158.
- Berntsen, D., & Rubin, D. C. (2002). Emotionally charged autobiographical memories across the life span: The recall of happy, sad, traumatic, and involuntary memories. *Psychology and Aging*, **17**, 636-652.
- Brewin, C. R. (1998). Intrusive autobiographical memories in depression and post-traumatic stress disorder. *Applied Cognitive Psychology*, **12**, 359-370.
- Brewin, C. R., Watson, M., McCarthy, S., Hyman, P., & Dayson, D. (1998). Memory processes and the course of anxiety and depression in cancer patients. *Psychological Medicine*, **28**, 219-224.
- Brown, N. R., & Schopflocher, D. (1998). Event cueing, event clusters, and the temporal distribution of autobiographical memories. *Applied Cognitive Psychology*, **12**, 305-319.
- Brown, R., & Kulik, J. (1977). Flashbulb memories. *Cognition*, **5**, 73-99.
- Burt, C. D. B. (1992). Reconstruction of the duration of autobiographical events. *Memory & Cognition*, **20**, 124-132.
- Burt, C. D. B., Watt, S. C., Mitchell, D. A., & Conway, M. A. (1998). Retrieving the sequence of autobiographical event components. *Applied Cognitive Psychology*, **12**, 321-338.
- Conway, M., Anderson, S. J., Larsen, S. F., Donnelly, C. M., McDaniel, M. A., McClelland, A. G. R., & Rawles, R. E. (1994). The formation of flashbulb memories. *Memory & Cognition*, **22**, 326-343.
- Conway, M. A., & Bekerian, D. A. (1987). Organization in autobiographical memory. *Memory & Cognition*, **15**, 119-132.
- Conway, M., & Ross, M. (1984). Getting what you want by revising what you had. *Journal of Personality and Social Psychology*, **47**, 738-748.
- Conway, M. A., Turk, D. J., Miller, S. L., Logan, J., Nebes, R. D., Meltzer, C. C., & Becker, J. T. (1999). A positron emission tomography (PET) study of autobiographical memory retrieval. *Memory*, **7**, 679-702.
- Csikszentmihalyi, M., & Beattie, O. V. (1979). Life themes: A theoretical and empirical exploration of their origins and effects. *Journal of Humanistic Psychology*, **19**, 45-63.
- Cully, J. A., LaVoie, D., & Gfeller, J. D. (2001). Reminiscence, personality, and psychological functioning in older adults. *The Gerontologist*, **41**, 89-95.
- Davis, P. J. (1999). Gender differences in autobiographical memory for childhood emotional experiences. *Journal of Personality and Social Psychology*, **76**, 498-510.
- Dritschel, B., Kogan, L., Burton, A., Burton, E., & Goddard, L. (1998). Everyday planning difficulties following traumatic brain injury: A role for autobiographical memory. *Brain Injury*, **12**, 875-886.
- Eacott, M. J., & Crawley, R. A. (1998). The offset of childhood amnesia: Memory for events that occurred before age 3. *Journal of Experimental Psychology: General*, **127**, 22-33.
- Eacott, M. J., & Crawley, R. A. (1999). Childhood amnesia: On answering questions about very early life events. *Memory*, **7**, 279-292.
- Ehrlichman, H., & Halpern, J. N. (1988). Affect and memory: Effects of pleasant and unpleasant odors on retrieval of happy and unhappy memories. *Journal of Personality and Social Psychology*, **55**, 769-779.
- Erikson, E. H., Erikson, J. M., & Kivnick, H. Q. (1986). Vital involvement in old age. New York: Norton. 朝長正徳・朝長梨枝子(訳) 1990 老年期 - 生き生きとしたかわりあい - みすず書房
- Evans, J., Williams, J. M. G., O'Loughlin, S., & Howells, K. (1992). Autobiographical memory and problem-solving strategies of parasuicide patients. *Psychological Medicine*, **22**, 399-405.
- Fitzgerald, J. M. (1981). Autobiographical memory: Reports in adolescence. *Canadian Journal of Psychology*, **35**, 69-73.
- Fivush, R. (1998). Gendered narratives: Elaboration, structure, and emotion in parent-child reminiscing across the preschool years. In C. P. Thompson et al (Eds.), *Autobiographical memory: Theoretical and applied perspectives*, 97-103. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
- Fromholt, P., & Larsen, S. F. (1991). Autobiographical memory in normal aging and primary degenerative dementia (dementia of Alzheimer type). *Journal of Gerontology: Psychological Sciences*, **46**, P85-91.
- Goddard, L., Dritschel, B., & Burton, A. (1996). Role of autobiographical memory in social problem solving and depression. *Journal of Abnormal Psychology*, **105**, 609-616.
- Goddard, L., Dritschel, B., & Burton, A. (1997). Social problem solving and autobiographical memory in non-clinical depression. *British Journal of Clinical Psychology*, **36**, 449-451.
- Habermas, T., & Paha, C. (2001). The development of coherence in adolescents' life narratives. *Narrative Inquiry*, **11**, 35-54.
- Hamond, N. R., & Fivush, R. (1991). Memories of Mickey Mouse: Young children recount their trip to Disneyworld. *Cognitive Development*, **6**, 433-448.
- Han, J. J., Leichtman, M. D., & Wang, Q. (1998). Autobiographical memory in Korean, Chinese, and American children. *Developmental Psychology*, **34**, 701-713.
- Harley, K., & Reese, E. (1999). Origins of autobiographical memory. *Developmental Psychology*, **35**, 1338-1348.

- Harvey, A. G., Bryant, R. A., & Dang, S. T. (1998). Autobiographical memory in acute stress disorder. *Journal of Consulting and Clinical Psychology, 66*, 500-506.
- Herz, R. S., & Schooler, J. W. (2002). A naturalistic study of autobiographical memories evoked by olfactory and visual cues: Testing the Proustian hypothesis. *American Journal of Psychology, 115*, 21-32.
- Hodges, J. R., & McCarthy, R. A. (1993). Autobiographical amnesia resulting from bilateral paramedian thalamic infarction. *Brain, 116*, 921-940.
- Holmes, A., & Conway, M. (1999). Generation identity and the reminiscence bump: Memory for public and private events. *Journal of Adult Development, 6*, 21-34.
- Hudson, J. A., & Fivush, R. (1991). As time goes by: Sixth graders remember a kindergarten experience. *Applied Cognitive Psychology, 5*, 347-360.
- Hyman, I. E. Jr., & Billings, F. J. (1998). Individual differences and the creation of false childhood memories. *Memory, 6*, 1-20.
- Hyman, I. E. Jr., & Faries, J. M. (1992). The functions of autobiographical memory. In M. A. Conway, D. C. Rubin, H. Spinnler, & W. A. Wagenaar (Eds.), *Theoretical perspectives on autobiographical memory*, 207-221. Dordrecht: Kluwer Academic Publishers.
- Hyman, I. E. Jr., & Pentland, J. (1996). The role of mental imagery in the creation of false childhood memories. *Journal of Memory and Language, 35*, 101-117.
- Jansari, A., & Parkin, A. J. (1996). Things that go bump in your life: Explaining the reminiscence bump in autobiographical memory. *Psychology and Aging, 11*, 85-91.
- 神谷俊次 (1997). 自伝的記憶の感情特性と再想起可能性 『アカデミア(自然科学・保険体育編)』, **6**, 1-11.
- 神谷俊次 (2003). 不随意記憶の機能に関する考察 - 想起状況の分析を通じて - 『心理学研究』, **74**, 444-451.
- Karney, B. R., & Coombs, R. H. (2000). Memory bias in long-term close relationships: Consistency or improvement? *Personality and Social Psychology Bulletin, 26*, 959-970.
- 小林多寿子 (1987). <都市化>とノスタルジー - 都市における奄美出身者の心性 - 『年報人間科学(大阪大学人間科学部)』, **8**, 23-40.
- 小林多寿子 (1992). <親密さ>と<深さ> - コミュニケーション論から見たライフストーリー - 『社会学評論』, **42**, 419-434.
- Kurbat, M. A., Shevell, S. K., & Rips, L. J. (1998). A year's memories: The calendar effect in autobiographical recall. *Memory & Cognition, 26*, 532-552.
- 黒川由紀子 (1994). 器質性障害を背景に有する夫婦の事例から 『心理臨床』, **7**, 192-198.
- 黒川由紀子 (1995). 痴呆老人に対する心理的アプローチ - 老人病院における回想法グループ - 『心理臨床学研究』, **13**, 169-179.
- Levine, L. J., Prohaska, V., Burgess, S. L., Rice, J. A., & Laulhere, T. M. (2001). Remembering past emotions: The role of current appraisals. *Cognition and Emotion, 15*, 393-417.
- Lewinsohn, P. M., & Rosenbaum, M. (1987). Recall of parental behavior by acute depressives, remitted depressives, and nondepressives. *Journal of Personality and Social Psychology, 52*, 611-619.
- Linton, M. (1975). Memory for real-world events. In D. A. Norman, & D. E. Rumelhart (Eds.), *Explorations in cognition*, 376-404. San Francisco, CA: Freeman & Company.
- Loftus, E. F. (1993). The reality of repressed memories. *American Psychologist, 48*, 518-537.
- Lyubomirsky, S., Caldwell, N. D., & Nolen-Hoeksema, S. (1998). Effects of ruminative and distracting responses to depressed mood on retrieval of autobiographical memories. *Journal of Personality and Social Psychology, 75*, 166-177.
- Maguire, E. A. (2002). Neuroimaging studies of autobiographical event memory. In A. Baddeley, M. Conway, & J. Aggleton (Eds.), *Episodic memory: New directions in research*, 164-180. Oxford: Oxford University Press.
- Mazzoni, G. A. L., Loftus, E. F., Seitz, A., & Lynn, S. J. (1999). Changing beliefs and memories through dream interpretation. *Applied Cognitive Psychology, 13*, 125-144.
- McAdams, D. P., Aubin, E. de St., & Logan, R. L. (1993). Generativity among young, midlife, and older adults. *Psychology and Aging, 8*, 221-230.
- McCloskey, M., Wible, C. G., & Cohen, N. (1988). Is there a special flashbulb-memory mechanism? *Journal of Experimental Psychology: General, 119*, 171-181.
- McFarland, C., Ross, M., & DeCourville, N. (1989). Women's theories of menstruation and biases in recall of menstrual symptoms. *Journal of Personality and Social Psychology, 57*, 522-531.
- Molinari, V., Cully, J. A., & Kendjellic, E. M. (2001). Reminiscence and its relationship to attachment and personality in geropsychiatric patients. *International Journal of Aging & Human Development, 52*, 173-184.
- Neimeyer, G. J., & Metzler, A. E. (1994). Personal identity and autobiographical recall. In U. Neisser & R. Fivush (Eds.), *The remembering self: Construction and accuracy in the self-narrative*, 105-135. Cambridge: Cambridge University Press.
- Newman, L. S., & Hedberg, D. A. (1999). Repressive coping and the inaccessibility of negative autobiographical memories: Converging evidence. *Personality and Individual Differences, 27*, 45-53.
- 野村晴夫 (2002). 高齢者の自己語りと自我同一性との関連 - 語りの構造的整合・一貫性に注目して - 『教育心理学研究』, **50**, 95-106.
- 野村信威・橋本宰 (2001). 老年期における回想の質と適応との関連 『発達心理学研究』, **12**, 75-86.
- Ornstein, P. A., Merritt, K. A., Baker-Ward, L., Furtado, E., Gordon, B. N., & Principe, G. (1998). Children's knowledge, expectation, and long-term retention. *Applied Cognitive Psychology, 12*, 387-405.
- 長田由紀子・長田久雄 (1994). 高齢者の回想と適応に関する研究 『発達心理学研究』, **5**, 1-10.
- Pillemer, D. B. (1992). Remembering personal circumstances: A functional analysis. In E. Winograd & U. Neisser (Eds.), *Affect and accuracy in recall: Studies of "flashbulb" memories*, 236-264. New York, NY:

- Cambridge University Press.
- Pillemer, D. B. (1998). *Momentous events, vivid memories*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Pillemer, D. B., Goldsmith, L. R., Panter, A. T., & White, S. H. (1988). Very-long term memories of the first year in college. *Journal of Experimental Psychology: Learning, Memory, and Cognition*, **14**, 709-715.
- Pillemer, D. B., Koff, E., Rhinehart, E. D., & Rierdan, J. (1987). Flashbulb memories of menarche and adult menstrual distress. *Journal of Adolescence*, **10**, 187-199.
- Pillemer, D. B., Picariello, M. L., & Pruetz, J. C. (1994). Very-long term memories of a salient preschool events. *Applied Cognitive Psychology*, **8**, 95-106.
- Reese, E., & Fivush, A. (1993). Parental styles of talking about the past. *Developmental Psychology*, **29**, 596-606.
- Reese, E., Haden, C. A., & Fivush, A. (1993). Mother-child conversations about the past: Relationships of style and memory over time. *Cognitive Development*, **8**, 403-430.
- Reiser, B. J., Black, J. B., & Abelson, R. P. (1985). Knowledge structures in the organization and retrieval of autobiographical memories. *Cognitive Psychology*, **17**, 89-137.
- Reviere, S. L., & Bakeman, R. (2001). The effects of early trauma on autobiographical memory and schematic self-representation. *Applied Cognitive Psychology*, **15**, S89-S100.
- Robinson, J. A. (1976). Sampling autobiographical memories. *Cognitive Psychology*, **8**, 578-595.
- Rubin, D. C., & Schulkind, M. D. (1997). Distribution of important and word-cued autobiographical memories in 20-, 35-, and 70-year-old adults. *Psychology and Aging*, **12**, 524-535.
- Rubin, D. C., Wetzler, S. E., & Nebes, R. D. (1986). Autobiographical memory across the lifespan. In D. C. Rubin (Ed.), *Autobiographical memory*, 202-221. New York, NY: Cambridge University Press.
- Sakaki, M. (2004). Effects of self-complexity on mood-incongruent recall. *Japanese Psychological Research*, **46**, 127-134.
- Salovey, P., & Singer, J. A. (1989). Mood congruency effects in recall of childhood versus recent memories. *Journal of Social Behavior & Personality*, **4**, 99-120.
- Sanitioso, R., Kunda, Z., & Fong, G. T. (1990). Motivated recruitment of autobiographical memories. *Journal of Personality and Social Psychology*, **59**, 229-241.
- 佐藤浩一 (2000). 思い出の中の教師 - 自伝的記憶の機能分析 - 『群馬大学教育学部紀要 人文・社会科学編』, **49**, 357-378.
- Schrauf, R. W., & Rubin, D. C. (1998). Bilingual autobiographical memory in older adult immigrants: A test of cognitive explanations of the reminiscence bump and the linguistic encoding of memories. *Journal of Memory and Language*, **39**, 437-457.
- Schuman, H., Belli, R. F., & Bischooping, K. (1997). The generation basis of historical knowledge. In J. W. Pennebaker et al (Eds.), *Collective memory of political events*, 47-77. Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
- Sheingold, K., & Tenney, Y. J. (1982). Memory for a salient childhood event. In U. Neisser (Ed.), *Memory observed: Remembering in natural contexts*, 201-212. San Francisco, CA: Freeman.
- 下島裕美 (2001). 自伝的記憶の時間的体制化 風間書房
- 白井利明 (2001). 青年の進路選択に及ぼす回想の効果 - 変容確認法の開発に関する研究() - 『大阪教育大学紀要(第部門 教育科学)』, **49**, 133-157.
- Sidley, G. L., Whitaler, K., Calam, R. M., & Wells, A. (1997). The relationship between problem-solving and autobiographical memory in parasuicide patients. *Behavioural and Cognitive Psychotherapy*, **25**, 195-202.
- Taft, L. B., & Nehrke, M. F. (1990). Reminiscence, life review, and ego integrity in nursing home residents. *International Aging and Human Development*, **30**, 189-196.
- Thompson, J., Morton, J., & Fraser, L. (1997). Memories for the Marchionese. *Memory*, **5**, 615-638.
- 上原泉 (1998). 再認が可能になる時期とエピソード報告開始時期の関係 『教育心理学研究』, **46**, 271-279.
- Wagenaar, W. A. (1986). My memory: A study of autobiographical memory over six years. *Cognitive Psychology*, **18**, 225-252.
- Wagenaar, W. A., & Groeneweg, J. (1990). The memory of concentration camp survivors. *Applied Cognitive Psychology*, **4**, 77-87.
- Webster, J. D. (1997). The reminiscence functions scale: A replication. *International Aging and Human Development*, **44**, 137-148.
- Welch-Ross, M. K. (1997). Mother-child participation in conversation about the past: Relationships to preschooler's theory of mind. *Developmental Psychology*, **33**, 618-629.
- West, T. A., & Bauer, P. J. (1999). Assumptions of infantile amnesia: Are there differences between early and later memories? *Memory*, **7**, 257-278.
- Williams, J. M. G. (1996). Depression and the specificity of autobiographical memory. In D. C. Rubin (Ed.), *Remembering our past: Studies in autobiographical memory*, 244-267. New York, NY: Cambridge University Press.
- Wilson, A. E., & Ross, M. (2001). From chump to champ: People's appraisals of their earlier and present selves. *Journal of Personality and Social Psychology*, **80**, 572-584.
- Woike, B., & Polo, M. (2001). Motive-related memories: Content, structure, and affect. *Journal of Personality*, **69**, 391-415.
- Wright, D. B., Gaskell, G. D., & O'Muirheartaigh, C. A. (1998). Flashbulb memory assumptions: Using national surveys to explore cognitive phenomena. *British Journal of Psychology*, **89**, 103-121.
- Wright, D. B., Gaskell, G. D., & O'Muirheartaigh, C. A. (1997). The reliability of the subjective reports of memories. *European Journal of Cognitive Psychology*, **9**, 313-323.
- 山口智子 (2000). 高齢者の人生の語りにおける類型化の試み - 回想についての基礎的研究として - 『心理臨床学研究』, **18**, 151-161.